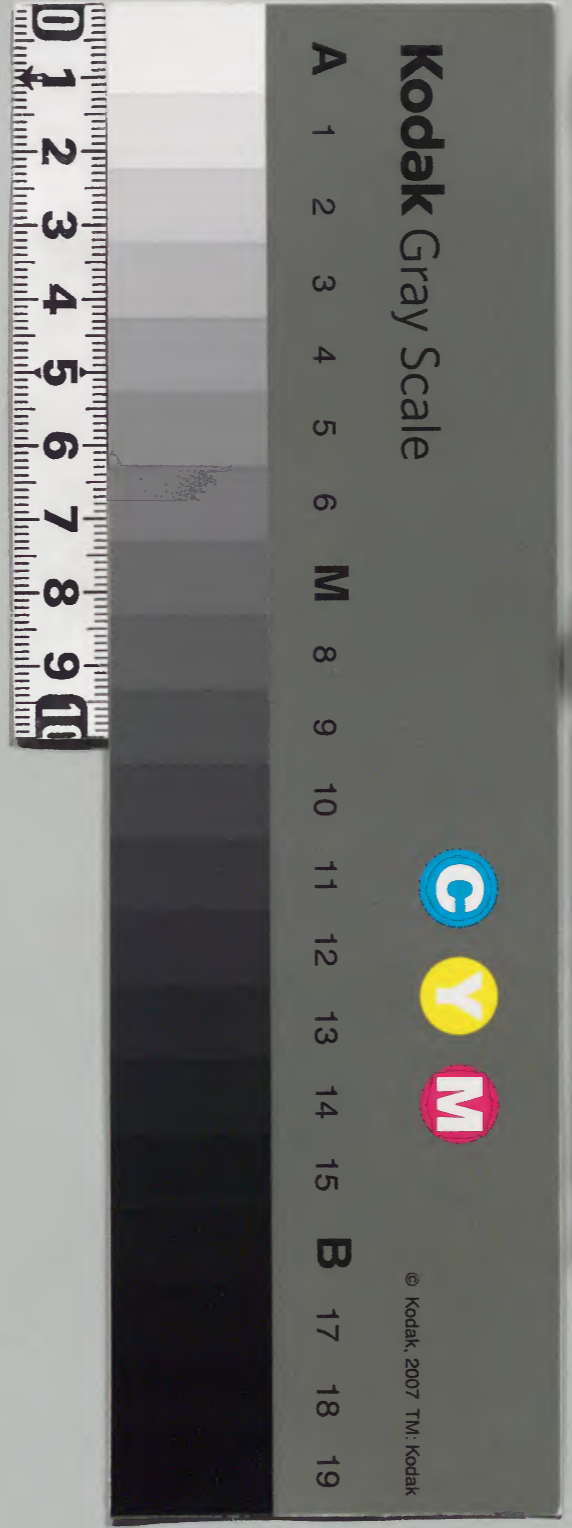


日本書紀傳 廿六卷 三

和書
一〇五二號

八十五

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (94)
函號	85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

教
文庫部
印

清印
文庫部
印

夜麻登
波云阿
歌書

あり備此小倭建命の御歌夜麻登波久尔能麻本真秀
波云阿阿加岐垣夜麻基母禮流夜麻登云云有御
歌書て見べし麻本呂波の麻ハ助字て此も国
の書あり又書紀の此御歌を景行天皇の大御哥々
一麻本呂波を摩保羅磨と有釋紀の私記日師説謂
鳥之和支乃之大乃毛乎為保羅磨也摩謂眞寶也言鳥
腋羽乃古止久掩藏之國也案奥區也今俗謂保呂羽訛
也云云今案大和國者奥區之由褒美也と云云此も山
の周廻れの中に包まれ隠りたる由あり略と之れた
了大和の事ハ此の用無まが右の夜麻登ハ夜麻都富

の説此の山戸の當りて實小妙あり其ハ此三神共ハ
山神と坐ハ非ズ其山區ある平坦の地の神ハ坐て
其を田と為ト畑と成トて農作を起ト弘めさせ給ハ
御功用を以て頂せ奉れる御名ありけり猶下百丁
羽山戸神の所ハ注ト奉トむを合せ讀ベト記傳ハ
ある民の居所ハ此神ハ山里を聞きて民の居ベキ處
の意あり然レハ此神ハ山里を聞きて民の居ベキ處
を成ト給ハるハ有ハるハ然レハ山里ハ事ハ
山字ハ甚ク力を入て見レタリ故ハ山里ハ限リ
事ト為レタリ予ハ心トハ表裡あり予ハ思
ハ所ハ彼山区の説ハ其ハ富ハるハ地ハ田園も廣ク
未穀も多キ者ハ國ハ其ハ本ト給ハ御功用ハ御在
迄ト廣メテ同ト國ハ富ト成ト給ハ御功用ハ御在
國号考の説の宜トキを曉レハ愈以て其ハ御幸神ハ名

義大年神ト同ト御在ト坐ト御幸申サも更アリ儲
御ハ充實の義ハ唯崇詞あり例ハ異ある可シ
御父ハ大年神ト坐ト御子ハ若年神御在ト坐を此神
ハト其中間ハ御在ト坐て御父神よりト御子神よ
りト殊ト專ト其稲穀の事ト御靈を幸給ト見えて
祈主祭詞ハ御年皇神等前ハ白久皇神等依奉
年ト有る等字ハ大年若年二神ハ係て申せるアリ大
嘗祭儀又大嘗祭式ハ所見たる於禰院祭神ハ座ハ其
第一ハ御歳神ト出たり此大嘗祭をト天皇の御世
の初ト立る事ある故ハ其天津日繼を所知者ト謂ハ

依て是年也大歳云云と書さる、御紀の文法あるを
以ても大年神をこそハ祭らせ給ふ可うりけれ然る
ハ其同名同徳ハ坐す大年神若年神の事ハ擧ずて此
神の御名のことを擧ぐるハ何處ハ祀するとも御年
神ハ其二神も共ハ副御座一坐して謂ゆ御力を合
せ御心を一ハ為て御座一坐を以て可し其中ハも
大年神ハ別ハ宇迦之御魂神と申奉りて稲穀の御
靈と坐し若年神ハ其生長ハ係る事有て三神共ハ登
志ト負坐ス義ハ於てハ異あらざるあがら主ト其年
を立主守り坐ハ殊ハ此神ハ坐を以て御年神と申奉

都

れるありけり其若年神ハ下ハ羽山戸神ハ子ト有を
全ク亦名あり別神ト傳ハれるあり御父大年神ハ
事更ハ疑を容へり此御年神より継て若年神あり
等能前ハ白久ト有ハ祈年祭ハ預り給ハ諸社を云ハ
下ハ御年皇神能前ハ云ハ有ハ御年神一社を云ハ
りト云れたれト委ト余社ハ祀れる迄を係
て申ハき事ハ此ハ右ハ三神共大倭神社註進狀
ハ倭大國魂神亦曰大地主神ハ八尺瓊為神体奉斎焉
ト有て相殿神二座八十戈神御歳神略御歳神者守護
禾穀神也是以ハ握穀稲為神体ト有る是ハて大地主
神ハ大地の神あり御年神ハ其地上ハ作る禾穀を守
護給ふ神あるト其差異を正ハ知べき文ある者あり

猶大忌祭詞ハ皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能
 穗^ハ聞食皇神能御加代^ハ始^ハ親王^ハ王等^ハ王臣等^ハ天下
 公^ハ民^ハ能取作奥都御歳者^ハ午^ハ胎^ハ水沫^ハ盡^ハ無^ハ向^ハ股^ハ泥^ハ盡
 寄^ハ取^ハ將^ハ作^ハ奥^ハ都^ハ御^ハ歳^ハ午^ハ八^ハ束^ハ穗^ハ皇^ハ神^ハ能成^ハ章^ハ賜^ハ者^ハ
 有^ハ此^ハ其^ハ未^ハ穀^ハの本^ハ神^ハ御^ハ在^ハ坐^ハ才^ハ廣^ハ願^ハ神^ハ申^ハす
 詞^ハあ^ハれ^ハど^ハも^ハ事^ハの^ハ一^ハあ^ハる^ハを^ハ以^ハて^ハ御^ハ年^ハ神^ハの^ハ御^ハ事^ハも^ハ大
 小^ハ抱^ハれ^ハる^ハ者^ハあ^ハり^ハ右^ハハ^ハ皇^ハ神^ハ能^ハ御^ハ加^ハ代^ハ其^ハ大^ハ忌^ハ社^ハの
 神^ハ田^ハを^ハ云^ハが^ハ如^ハし^ハと^ハ雖^ハも^ハ然^ハハ^ハ非^ハす^ハし^ハて^ハ天^ハ皇^ハの^ハ御^ハ田
 申^ハせ^ハる^ハあ^ハり^ハ故^ハ其^ハ御^ハ刀^ハ代^ハと^ハ云^ハハ^ハ鈴^ハ屋^ハ大^ハ人^ハの^ハ云^ハれ^ハ九
 〇^ハ如^ハく^ハ御^ハ年^ハハ^ハ稻^ハふ^ハて^ハ代^ハハ^ハ其^ハ御^ハ稻^ハを^ハ作^ハる^ハ田^ハの^ハ事^ハを

れハ次^ハ云^ハふ^ハ奥^ハ都^ハ御^ハ歳^ハハ^ハ同^ハト^ハ事^ハハ^ハて^ハ風^ハ神^ハ祭^ハ詞^ハ
 皇^ハ御^ハ孫^ハ命^ハ乃^ハ遠^ハ御^ハ膳^ハ乃^ハ長^ハ御^ハ膳^ハ止^ハ赤^ハ丹^ハ穗^ハ聞^ハ食^ハ須^ハ五^ハ穀
 物^ハ并^ハ始^ハ天下^ハ乃^ハ公^ハ民^ハ乃^ハ作^ハ物^ハ云^ハ云^ハと^ハ有^ハと^ハ言^ハの^ハ續^ハ言
 の^ハ同^ハト^ハき^ハ所^ハあ^ハる^ハを^ハ合^ハせ^ハ讀^ハて^ハ曉^ハる^ハ可^ハし^ハ然^ハれ^ハハ^ハ皇^ハ神^ハ能^ハ
 御^ハ刀^ハ代^ハと^ハ云^ハハ^ハ皇^ハ神^ハの^ハ御^ハ年^ハを^ハ作^ハる^ハ田^ハと^ハ云^ハ事^ハハ^ハ天^ハ
 皇^ハの^ハ御^ハ田^ハを^ハ云^ハて^ハ次^ハハ^ハ王^ハ臣^ハ以^ハ下^ハ天^ハ下^ハ公^ハ民^ハの^ハ作^ハる^ハ稻^ハの
 事^ハハ^ハも^ハ及^ハべ^ハる^ハ者^ハあ^ハり^ハ此^ハハ^ハて^ハ其^ハ未^ハ穀^ハと^ハ田^ハ地^ハと^ハを^ハ別^ハち
 云^ハる^ハを^ハ曉^ハる^ハ可^ハし^ハ若^ハて^ハ天^ハ下^ハハ^ハ在^ハゆ^ハる^ハ稻^ハ穀^ハハ^ハ天^ハ皇^ハの^ハ長
 悉^ハく^ハハ^ハ皇^ハ神^ハの^ハ御^ハ年^ハを^ハ作^ハる^ハと^ハ云^ハ義^ハハ^ハし^ハて^ハ聞^ハ食^ハす^ハ料^ハハ^ハて
 御^ハ事^ハを^ハ並^ハべ^ハ奉^ハた^ハる^ハ言^ハ狀^ハハ^ハし^ハて^ハ古^ハ文^ハの^ハ妙^ハあ^ハる^ハ處^ハを^ハ
 此^ハハ^ハ在^ハて^ハ聞^ハめ^ハあ^ハる^ハ委^ハし^ハて^ハ祝^ハ詞^ハ講^ハ義^ハハ^ハ就^ハて^ハ見^ハへ^ハし
 備^ハ崇^ハ神^ハ天^ハ皇^ハ七^ハ年^ハ御^ハ紀^ハ十^ハ定^ハ神^ハ地^ハ神^ハ産^ハと^ハ書^ハされ^ハ神^ハ功^ハ皇

皇元年御紀小定神田而佃と有る神地神田ハ其共
御刀代の事あり持統天皇四年御紀増神戸田地の
四字を美登志呂と訓りたて神の封田も限り然云
ハ御年田と云事ハ神の御福ある由を以て出せし
ふれども其本ハ大忌祭詞の如く天皇の御をも申し
又永穀ハ御年神の寄奉り天下の人小賜を意を
以て其神小属て故此御年神の主と永穀を守護の給
敬おひ申すあり故此御年神の主と永穀を守護の給
ふ其證ハ古語拾遺小昔在神代大地主神嘗田之日以
牛実食田人于時御歳神之子唾嚙而還以狀告父御歳
神發怒以蝗放其田苗葉忽枯損似篠竹於是大地主神
令片巫志止胎巫及今俗電輪占求其由御歳神為出宣軌
白猪白馬白鷄以解其怒依教奉謝御歳神答曰実吾意
也宜以麻柄作標標之乃以其葉掃之以天押草押之以

鳥扇阿不氣若如此不出去者宜以牛完置溝口作男莖
形以加之是所以厭以薏子蜀椒吳挑葉及鹽班置其畔
古語以薏仍從其教苗葉復茂年教豊稔是今神祇官以
目都須 仍從其教苗葉復茂年教豊稔是今神祇官以
白猪白馬白鷄祭御歳神之縁也と有る此文を解て知
るハ事あり右ハ謂ゆる御歳神之子ハ若年神以下
の神等ハ御在坐べりむ事下百丁ハ説る如
小至於其田ハ己ハ稼穡の神として當昔より此御
歳神を祭祀せ給へるありけり皇太神宮儀式帳ハ
先始末子日太神宮朝御饌夕御饌供奉田種蒔下始祢
宜内人等云云山口神祭之云即木本祭祀物敷員然其

木本^平山向物忌^々令以忌^{ツテ}銚^豆切始^豆然即祢^豆内人
等加戸人夫等^仁令切^豆湯銚^仁造持^豆諸祢^豆内人等
波真佐岐^豆為^豆下末太神乃御饌所乃御田^仁致立酒
作乃物忌乃父^仁忌銚令取採^豆太神乃御刀代田耕始
略^下有て共式の嚴重ある事如此^一此を遠久行事記
小^一銚山伊賀利神事と題せる共式の中^一當年歳徳
神所在方山入各以堅木銚作以葛^豆作御歳木採出將云
云^一有る銚山^一右の忌銚の柄を伐^豆伊賀利^一稲蒭
おて田殖^豆あり稲蒭^豆至^豆迄の所作を成^一し神事
を行ふ事とぞ^一諸右の歳徳神所在方^一上^一九^一丁^一小^一云^一

後國、後
國の誤

△神中抄十六
小春田^一むと爲
る時^一小^一物吉
人の障無きを何
人とも員を定め
て家小時集めて給
ふ^一進^一いて物を
食^一也^一餐^一應^一して
年木と云物を伐
せて^一家の後國^一
立ち^一あり具木^一
細長^一あり木の
枝^一も無^一きを伐
て^一刺^一小^一小^一倉^一
小水^一を入^一て於^一杯
呂^一と云^一る物を具
して^一末^一結^一付^一
後^一方^一小^一立^一て其^一年
の秋^一作^一り^一れ^一る^一由
を^一始^一て^一州^一て^一春^一伐
く^一勢^一の^一人^一を^一
集^一めて^一門^一を^一刺^一

が如く己く此神等と然る事小申し掠めたる説の從
へるおて古小^一且^一ても無^一き事おれども等由氣宮儀
式帳忌鍛冶内人職掌條^一御歳木^一と云事有^一更^一あり
中古の哥^一の歳木伐^一と云事有^一人^一の春始^一の薪を取
入^一る事^一と思^一ふ^一め^一れ^一ども然^一る^一ず^一右^一の如^一く^一兩^一神^一宮^一の御
事^一ハ^一申^一奉^一る^一も^一更^一あり^一年^一始^一小^一此^一神^一を^一祭^一る^一と云^一小^一天^一下
一般の風儀あり^一事^一を知^一べ^一し^一荒^一木^一田^一光^一徳^一小^一聞^一る^一ハ

〇固めて禱^一出^一來^一ぬ^一前^一小^一御^一禱^一お^一して^一會^一は^一重^一き^一あり^一祖^一經^一御^一來^一人^一の^一白^一る^一あり
切^一何^一か^一も^一其^一言^一を^一た^一ふ^一高^一き^一さ^一り^一聲^一言^一ハ^一年^一久^一しく^一田^一舎^一お^一ど^一小^一在^一つ
る^一親^一の^一珍^一り^一全^一上^一み^一て^一是^一問^一ふ^一て^一叩^一立^一る^一を^一も^一入^一ぬ^一り^一音^一を^一祭^一り
木^一ハ^一賀^一茂^一の^一小^一屋^一共^一ハ^一も^一家^一毎^一お^一きて^一侍^一る^一松^一の^一細^一を^一て^一文^一計^一を^一祭^一り
て^一未^一許^一小^一葉^一存^一お^一持^一て^一侍^一る^一意^一を^一著^一た^一り^一と^一有^一れ^一
御^一年^一木^一の^一壯^一一^一様^一ら^一ざ^一り^一と^一見^一ゆ^一面^一ヲ^一立^一置^一て^一行^一事^一有^一あり^一此

〇日本書紀傳二十六

〇百十九

△但夫木大い島
島の松山川の枝
師の急ぐ年木を
積や添うむと有
ハ春の設の社新を
云て右の御歳
木とハ別あり

歳木の事外宮ハ古ハ在テ今絶え内宮ハ書ハ記
さいるを今愷ハ在リと云るハ然る事あり但御歳木
ハ神の御坐ハ非ハ大殿祭詞の本注ハ謂ゆる辟木
の事ハ一して此あるハ御年神の神籬ハ者あり辟木
の事ハ傳十九五百云云考合可一今諸国ハ年始
此ハ歳徳神ハ神ハ其神体ハ謂ゆる辟木を以て記
事ハ此大年御年若年の三神を祭ルハ其を今
佐伊木と云ハ辟木ハ伊ハ轉ハ其ハ有ハ有ハ
も歳木ハ神ハ字音ハ外ハ合ハ者あり備予ハ本
編ハ其年中ハ樞葉ハ正月ハ九日ハ有ハ有ハ
ゆも右ハ朝熊神ハ申すあり此ハ朝熊神ハ大
儀ハ今櫻宮ハ見えたるハ本著て予ハ説ハ上ハ云
りき

備右ハ伊勢神宮の御刀代有る故ハ然嚴重有る神
事を被行るしハこそハ有けれ押並て世ハ然ハ非
ハと思ふれれども其ハ市中ハ住ハ農作ハ事ハ
得と知さる學者の予見マ云者ハ一して予諸国を巡り
見る小国ハ依り處ハ依て夫ハ其ハ有れども種
蔣田殖の時ハ必神祭を行ハ事音ハ苗上と云て饗
を為さるハ皆神代の遺風ある者あり万葉セハ小
湯種蔣荒木之小田兵永跡足結出所沾此水之満ル十
五下ハ安字揚疑能延太伎呂於呂之湯種蔣忌ニ伎美
ハ故非和多流香母有て此ハ湯種と云ハ右の儀式

又初苗小野草
の玉取を割て
五十串を御年
作りは小野草
木集五か又支
水口の道五十
水口を御年
曾丹集御生
引一賀茂の御年
代引種を今將年
の神を祈るむ
夫木集か上句御
阿礼川賀茂の御
年代引種を今換
れり
△此の板も用から
物ちて堀河百首
荒和板を六月
の清き川原か五
十串立板ふ事
を今神受つらし
ま木集九の板
ふる事を神ハ
受らむと有て
此の共の語ゆり板
串の事より建え

帳の忘銘忘鉄おど云ふ忘小同くして神田ありぬ
田のし裔清まはりて種を下す事おて其ハ御年神を
祀るが故ある事云も更あり堀河百首の谷水を塞く
水口伊具志の忘串立五百代水田の種蒔てけり有る伊具
志ハ寶鏡開始章第二一書ハ謂ゆる八十五載の類ハ
一ハ謂五十櫛亦云今木刺統於布都主劍大神之見え
万葉十三丁ハ五ヶ串立神酒座奉神主部之雲聚玉蔭
見者之文と有る此五十櫛あるハ其を今木と云ふ今
ハ借字ハ一ハ裔木イヒヒの義あり若て此裔木即上ハ謂ゆる
御歳木ハ當りて此ハハ御年神を祭る神離ある

行事記小柳之林木綿付と有る是より傳サニ百見り可なり

事云も更あり上古ハ大地主神の祀給へり遺風の
如此ある傳ハれるハ甚く愛なき禮典ハて此ハ勝れ
了美事ハ無きを今一も天下一般ハ行ハるハあむ実
小神の御國ハあり事ありけり今思出けり予
ハ正月九日峯様と申し神離と立て淡路國かどハ予
の杭ハ作り其上を四ハ割り十五日ハ木を一寸余
の至りて其事を苗代の中ハ立て梁盛を田畦ハ備
て祭る事あり田殖ハ時ハ然る串ハ無くして粟豆を
水ハ浸したるハ洗米を合せ大あるハ葉ハ盛て水口
ハ置く事おて其田を殖竟た後ハ能煩理と云て
小神を祭り家内おて祝を成し親類おて招き互ハ
小郷食を為る事ハ一ハて凡て年中田を作ら小物事ハ神
事ありぬハ無き事ありて我國ハ少ハ然るハ無ハ
て他國ハ事ハ聞合するハ其狀ハ少ハ然るハ無ハ
ハハ非れど其意味若て御歳神災怒以蝗放其田苗葉
ハハ概同トさあり

日本書紀傳二十六

百二十一

忽枯損似篠竹々云々此御年神ハ一も禾穀を守護り
給ふ神ハ御在一坐すを却しまし其苗稼を枯損為
め給へるハ其牛宮を以て田人ハ令食給へる事ハ純
て御怒坐るあり然れども此御事の御在一坐けるハ
依て其禾穀を守護る世給ふ状も知る此且此神ハ祈
りて年穀の豊登る幸を致し其ハ反りて苗稼の枯損
ぬたるを活し復す法の出来れるハ即後世の幸ハ
て彼石戸段ある大福事ハ天壤と無窮き大吉事と成
れると專同ト理ある是あり然して其神の実吾意也
と詔給へるハ天下の禾穀の成否ハ一も即此神の御

意ハ由る事ある故ハ仁徳天皇御紀十二年御紀十堀大溝
於粟隈縣以潤田是以百姓每豊年也又其十四年ハ故
其處百姓寛饒之無凶年之患也と有ハ如く豊年を年
得と云ハ凶年を年不獲と云ハ是御年神の御靈物を
得ると得ざるとハ係れる事あるを以て顯宗天皇
二年御紀ハ歲比登稔百姓殷富と有る登稔を也登志
延代と訓ハ傍ハ那理波比阿理とも云訓を添て其義
を相明せる者あり仁徳天皇八年御紀ハ是歲五穀登
カクテ有る此ハ本訓意比由多加と有ハ生饒の義ハ
るハ傍ハ登志延の言をも副て其義を詳ハ為る者ハ

り古今六帖より乾す山田の稲を計へつゝ多くの
 年を積りける哉續拾遺集の璞の年有る秋御世の秋
 係て採るや早苗小今日も暮つと寶治御百首不足
 の山田の早苗數くも年有る民の程を知らず又
 渡る民の草葉も年有れば君の靡く千代の秋迄
 ざるを始として古歌の此稲を登志と詠るに數知らず
 き事あり但祈年祭詞の皇神等能依奉年奥津御年
 半と有て天下の稲穀は皇御孫尊の神の依奉給へ
 るあり謂ゆる天津日繼と申奉れるは其神の寄せ奉
 る稲穀を天下の百姓の佃りて其日繼の御貢を

所知者す御職の渡りせ給へる由あり新千載集の邊
 く連き民の早苗の御貢物絶ぬ日繼の程を知る
 寶治御百首の道邊の山田の早苗御注連引延て永
 き日繼の早苗採る由と有る道の意を得たる歌
 と謂つ可き者ありくし然れば天下に在る稲穀を食ひて其
 性命を續ぐ人にして此御神の御靈を蒙るは有
 無く又天皇尊の御蔭の寄る者一人として有
 る事無きを然る神の御在り坐て斯る御事を行ふ
 御在り坐して神の本より知りて年豊の御事行ふ
 御思成して神を蔑如し奉りて其稲穀の偶然地上
 不出來成りし限を悉く奉りて其稲穀の偶然地上
 然る事やい知りて己等が領地に成る所の物を分ち進
 月踊成す荒ぶる悪しき神の勝れる土人の多し
 胡俗と共成て犬戎の心あるを以て皇神の四討めさ

傳廿二下寶祚の所引る

△大神宮式神寶の
 中より利又麻呂
 や小並へて金銅(銅)
 世比二枚長三寸五分銀
 銅質一枚長三寸五分
 と見え江神祭詞にも
 比受神御腹備等
 麻呂金能補金能持
 とし有る神宮古記
 小持三枚懸五色絲
 体也も有る言辭杖
 小云ひ又万葉六四
 江小懸等之緒持
 繫云鹿背之山ノ縁
 りと懸を掛ま具ち
 るといふなり

せ給へりけり一頃年ハ大風ハ地震ハ打續きて年と
 得ざれども然る神皇の御罰めり知る人更中無り
 け其神の御教の宜以麻葉作持持之乃以其葉掃之以
 天押草押之以烏扇阿不気と有る以下ハ謂ゆる禁厭
 の術あり中ハ此ハ祓除の状ありけり其麻柄を
 以て作持と云小持字ハ加世と訓べし和名抄行旅具
 小横首杖唐韻云魁他礼反此体同漢語杖云横首杖也
 と見え又僧房具小鹿杖漢語杖加勢とも見え字書小
 拐杖老人拄杖也注して丁字の形あり杖と見え又
 拐架カセボエを撃角鷹之格也云るも同じ形を以て号け
 る可く又粟磗カシラハ穀の穀を去る為小磗カシラを廻す柄

を加世と云ひ糸を懸る番を加世比右ハ云るの云も右の横首
 と云状か上下の横なりたる不有る糸の懸る可き所有ありを以てあり人の業小力を盡す事カセを加稼
 ぐと云ふども物小係列小謂めて皆同言あり然る時
 ハ此作持ハ右考の具横首杖稲の末の掛り科の如き物を作事ありけり持之
 ハ其加世比より兼て加世具と云事次其縁語以云る
 例是あり此字各義抄續紀天平下年小持攪る有る持字の如し訓の持持持の三字を擧て下小俗
 弄字と注し母依阿曹夫とも比佐久流杖宇都とも佐豆久とも
 那具流とも底字知麻布又底字知都又底須流とも美
 自加志とも久陀久とも訓て此ハ其訓無しと虽も加
 世具ハ其蝗を持以て散す散すを加世具ハ云ありけ

り以^レ其葉掃^レ之、後拾遺集の六月夜を詠る和泉式部
 思^ハ山事皆盡^レ收^レて麻葉を切^レ切^レても被^レつる哉と有
 て解^レ葉^ノ麻葉を用ふと事ハ別^レ別^レとして被^レ拂^レ意ハ同^レ
 きあり以^レ天押草押^レ之ハ本草和名又和名枚^ノ玄參一名重臺和名
 久^ク有^リ是^レあり以^レ烏扇阿不氣本草和名ノ射干一
 名烏扇云和名加良須阿布岐と見えたり右ノ如^ク
 小^シて一^ハ打^チ一^ハ掃^ヒ一^ハ押^シ一^ハ扇^キて其蝗を
 出^レ去^レ一^ハむる^ノて此ハ同^レ禁厭一種ノ事後傳又云中^ノ小^ノも実事^ノ
九百四十一ノ注せるを以明^ルむ可^キ者所作^ノ係^リたる事あり故^ニ今^も然^ル物^ノ為^ルた^ルむ^ノ決
 を人心^ノ校意^ハ成^レ竟^レてけ^レれ^バ此^ノ小^ノ其^ノ蝗^ノありける
 七^ツざるや疑^ハ有^テ物^ノ為^ルた^ルむ^ノ如何^ニある神方奇術

たりとも其應驗無^ク可^キきを唯邊僻^ノの老農^ノあり
 出^レ来^ルま^シき事あり今世^ノも此傳^ノの遺^レれ^ル國有
 や甚^ク床^ノ如此^ニ不出^ル者^ノと上^ルある四^ノ事^ノを成^シ
 べき事ありて必^ズ正^シの微驗^ハ有^ル不^レ究^ルりたる事^ノある故^ニ若^ク字^ノを上^ル
 置^ルるあり然^レて以^テ牛完^ノ置^ク溝^ノと云^ハ稻^ノ莖^ノ已^ニ不^レ食
 入^ルたるハ打^テても掃^テても押^テても扇^テても盡^ス可^クらざる
 あり此^レを以^テ此神策^ノを設^セせ給^ヘる^ノハ牛完^ノ
 以^テ溝^ノ口^ノ置^キ其膏^ノを水^ト共^ニ流^シ入^テ蝗^ノを殺^シ
 盡^サせ給^ハむとの御事^ト聞^ケ今^ハ蝗^ノの時^ノ當^リて
 ハ鯨油^ノを濯^ギ入^テ其油氣^ノの水^ノ浮^バ時^ハ必^ズ其氣^ノ
 稻^ノ莖^ノへも染^リ巨^リて死^ス盡^ルると云^ハる^ノ思^ハ合^ス可^ク然^レれ

此事も術ありて上ある例ありぬこと有るの次
作男莖形加之と有る如何あり由ありぬ米思得ず
と雖も是所以厭其心也と注せる其心と云は神の心
ありや虫の心ありや今考ふ此は其蝗を司る神の
心あり可し元来此蝗は神怒り由て起れる者を
りければ其を治給ふ神も御年神あり外小在るを
を其神をしも和ます所作して天鈿女命の掛出胸
乳裳緒是垂於富登也と云は其意味必相似たる可し
然れば此は上件蝗を拂ひ殺すこと異ふて今も其放
てる神を有を笑ひ和ませ給ふ禁厭事なり有けり

以薏子蜀椒吳桃葉及鹽班置其畔と有は此物共ハ莖
く蝗ハ言有て年穀の為ハ大小利用を成す物あり
可き事下文ハ見合せて曉る可し薏子を古語以薏曰
都須ハ本草和名ハ薏苡子和名都之太末と見え和名
枚ハ薏苡一名芋珠和名豆之太萬と有り是あり然れば都
須も都之と云けるあり蜀椒ハ本草和名ハ蜀椒
和名布佐波之加美と有る是あり其を那流波之加
美と云ふ共ハ草根ハ生薑ハ別ハ房薑又生薑とも云
て其實を以て云称あり吳桃葉ハ同書ハ桃和名ハ苗
美と有る是あり班置其畔ハ上ある牛完ハ男莖形

を加へて一溝口を置べし此なる四種物の處を
班ちて其畔を置べしとあり如此く大地主神の御田
を營ふ一々時一度過よせ給ひて田人の牛完を令
食給へるより御歳神其御怒を成し給ひ其御怒の依
れは奉謝る道定り其の就ては其蝗を除きて全穂を
得べき神教を此の得させ給ひて天下を示し後世に
傳へさせ給へるふむ甚も尊く尊き御事ありけ
るも諸石の作男墓形如之と云事の就て国に然る事
り男墓形を石の造れるを今も出羽國庄内の邊に
ありき土俗の問の其故を知らずし唯梵天と云て祭る
神体と為る由佛祖経記あり見えたる其を取て僧

所以に近国の百姓
共多く詣て年殺
と祈り其蝗厄を
紙を小さく割て唾
かき粘りこれに其
葉を成す事ありと

徒の号けたる者ありて云ふも足ざれども土俗の其
を田畔に立て祭る其の故事由有て最尚は
可き事あり又其國の大事忌神社御在し坐す是豊
受大神の渡り給ふ事傳十卷四十三下注し給
如し然る例年二月九日其神の石礮を降る給
ふとて人皆山に入りて事を憚りて物為さる事あり
山も限らず人家ありて其蜀椒木も多し立て有
事あり此の蝗穴と云有て大なる巖窟の有り其
も此の山頂の蝗穴の中なる其蝗の集居る事甚奇
さし四月其の雪の中なる其蝗の集居る事甚奇
うる年六月七月の少くして全穂を得る事あり
のて里の蝗多し此の神の御力を合せさし御在し坐す
由縁有ての御是今神祇官以白猪白馬白鶏祭御歳神
事ありと有し祈年祭の起源此に始れる事を明せる
之縁也と有し祈年祭の起源此に始れる事を明せる
文あり其の四時祭式に神祇祭神七百三十七座略右

△神名式の中謂内
大和国葛上郡葛
本御歳神社大神
御新と有る

神祇官所祭幣帛一依前件往天_三神宮度會宮各加馬一疋
籠頭料_{一段}御歳社加白馬白猪白鶏各一路_下有て伊勢
神宮の垂て公此社の幣帛の事を汝汰し申させ給ひ
祝詞式ハ其祈年祭詞有て此神詞を_{申す}も皇祖天神
の夏止事無く御在し坐よりハ其先ハ抽出て舉りれ
たりも其祈年の年ハ此大年御年若年三神の皇御孫
尊ハ依し奉給ふ年を祈ハせ給へる由なれば此神ハ
就て起れり祭る事申すも更あり故其始ハしも此
ハ大地主神の定めさせ給ふ所なるが因_ハ避の御時ハ
こそハ皇祖天神の御許ハ_と聞上させ御在し坐

たりけりし其詞ハ高天原_ハ神留坐皇睦神漏伎命神
漏弥命以天社国社_登祢辞竟奉皇神等_能前_ハ白久今
年二月_ハ御年初將賜_登為而云云と有て其結文_ハ故
皇吾睦神漏伎命神漏_{美命}登皇御孫命_能字豆の幣帛
字祢辞竟奉_登宣と有て此ハ_ハ高天原より行ひ定
めて事依し奉りせ給へる趣あり故思ふハ崇神天皇
六年御紀ハ先是天照太神倭大国魂二神並祭於天皇
同殿之内と所見たるハ_傳右の注進狀_ハ以ハ握嚴稻為
神体と有る神体も共ハ天上より天降りせ給へる任
ハ天皇の御許ハ御在し坐けるを其主神の御名をの

之攀りて從祀の方ハ漏されたりけむ事右の天照
 太神と申すも八咫鏡草薙劔にて御在り坐す等しく
 此大倭大神も国避の時ハ奉りて給へる謂ゆる瑞八
 坂瓊と廣矛との二種ある大地主神の當昔御田を
 營りて給ひ一時ハ彼御歳神を奉謝りて給へる其田
 ハ得させ給へりしハ榎叢稲を神体と定め又其祭の
 式をも其故事を述て奏させ給へりけむを皇祖天神
 の御許ゆかりに天璽の三種神寶を取副て天降り奉りて
 給へりけむと其有つる事實を約まて然るむ思ひ取
 るとある神名式ハ大和国山邊郡大和坐大国魂神神社

△始

三座並名神大月之有る是あり然れども此の御
 殿年神ハ相殿神にて渡りて給ふが故ハ此大地主神
 の定めさせ給ふ所の神祭其外たての事共ハ葛木ハ
 御在り坐す方ハて上古より執行ハさせ給ひけり
 先ハ天孫降臨章第二一書ハ天照太神勅曰以吾高
 天原所御齋庭之穗亦當御於吾見と有る穂あり坐す
 思ひ天原所御齋庭之穗亦當御於吾見と有る穂あり坐す
 て此天原所御齋庭之穗亦當御於吾見と有る穂あり坐す
 の瑞穂國と成り給へる播種ハ今天下ハ洲の國内
 ハ祖禰ありと思ひ給へる物ハ昔ニ神の神体ありと
 異命あり可農人袋と云物ハ昔ニ神の神体ありと
 屋根命降給ひて三神と云物ハ昔ニ神の神体ありと
 男岳命降給ひて三神と云物ハ昔ニ神の神体ありと
 世給ふ稲田を以て神田と云物ハ昔ニ神の神体ありと
 眞田新田と云物ハ昔ニ神の神体ありと
 云物ハ昔ニ神の神体ありと

○日本書紀傳二十六

○百二十九

突給へ清水涌出て井と成れる其水を引て植給
ふ依て三田井村と云ふ日向郡高千穂村に在
り云々有る此神を二柱御祖神の御事云々
本より誤ある事論を待ず此男御二神ハ瓊杵尊ハ
木華開耶姫命二神の御事此御座ハ行幸ハ
謂ゆ諸縣郡の高千穂宮なるれども此處ハ在
御田を佃始させ御在坐ける古傳の此ハ在
る事可けれ甚難う右件ハ唯土人の傳ふる所
に事ハ因云うに神各式ハ大和国葛上郡葛木御歳
神社次新嘗月と有ハ右の引る四時祭式ハ謂ゆる御
歳社是あり各神祭條ハ葛木御歳神社一座と有れど
も大年神若牟神あども同一御功用ハ御在坐と云
ハ御父子の御間にて御在坐せハ若共ハ鎮座坐す
御事と見えて其祈年祭詞ハ御年皇神等能前ハ白久

皇神等能依左奉牟奥津御年牟手肱ハ水沫畫無向股
尔泥畫寄能取作牟奥津御年牟八束穗能伊加志穗尔
皇神等能依左奉者初穗字千穎ハ百穎尔奉置能魁閑
高知魁腹満雙能汁ハ穎母能称辞竟奉牟大野原尔生物
者甘菜辛菜青海原住物者鱒能廣物鱒能狭物奥津藻
菜邊津藻菜牟至能御服者明妙照妙和妙荒妙尔称辞
竟奉牟御年皇神能前尔白馬白猪白鷄種ハ色物牟備
奉能皇御孫命能宇豆乃幣帛牟称辞竟奉能宣ハ所見
たる是を以て幾座も並以御在坐す事を明らめ奉
る可一記傳十二三十八丁ハ上文ハ御年皇神等能前尔白

久と有ハ祈年祭ハ預給小諸社を都て云以下文ハ御
年皇神前々ト云ハ御年神一社を云ありト云れたれ
ども然らず他處ハ祀れざるを此社ハ於て祭らせ給
ふト云事ハ例無事あり故此上文ハ皇神等ト有ハ
其大年御年若年等の三神ハ年を祈給ふ故ハ此を
合せて申し下文ハ御年皇神ト云ハ右ハ引る古語拾
遺ハ故事ハ唯一神ハ係れるを以て皇神等トハ申さ
ざるあり文を讀下して辨ふべし神階ハ御事ハ文德
天皇實錄ハ仁壽二年夏四月丁酉朔庚申加大和国御
歳神從二位ト有るを見れば其以前ハ己ハ其御事の御

大和国三歳神由
無神主而新置
致崇祀之實也
仍更停止焉

右一坐つるを略き載りれざるあり同年冬十月癸
亥朔甲子加大和国御歳神正二位ト見え清和天皇實
錄ハ貞觀元年正月廿七日甲申奉授大和国正二位葛
木御歳神從一位ト有り大倭神社注進狀ハ新国史曰
寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉授五畿七道諸神三
百四十社各位一階ト有る此員ハ加ハるせ給へる也
ハ此時正一位ハ極位ハ進ませ給へる也同ハ
年二月ハ新置神主ト云事所見たれ又神名式ハ同国
高市郡御歳神社ト見えたる此ハ其別社不ども
ハ備右の葛木御歳神社ハ大和志ハ在持田村東ト云
ハ或ハ森原村ありト云れども其地ハ御在り坐

一と重も其神を
御歳神と申す
ハ非ず其御歳神
社ハ從祀とし
御在坐とある
可けれ必見
心得有べき事
あり

ハ謂りて見奉る木坐一言主社
奉りて見奉る木坐一言主社
御歳大明神と奉りて見奉る木坐
ハ山有て神境木坐一言主社
田と云ハ大(貴)神謂つ前
田と云ハ大(貴)神謂つ前
高彦根神の下坐を捨給へる
高彦根神の下坐を捨給へる
神上九下を信と泉坐と神代
神上九下を信と泉坐と神代
す可し如何を見へず正しく
す可し如何を見へず正しく
ハ始て祭も給へりけり又御社
ハ始て祭も給へりけり又御社
所光姫大神命坐倚りけり又御社
所光姫大神命坐倚りけり又御社
鴨都波八重事代主命の御妹社
鴨都波八重事代主命の御妹社
の妄事あり然る事あり次を見
の妄事あり然る事あり次を見

且傳三十
大物主神五世孫
後者有れ右の
御歳祝も本より
貴神の神方と傳
へけむ然も有ぬ
べき事ありか
皆水無を

彈国大野郡水無神社大同癸聚方飛太藥大野郡御
翻水無神社御歳祝之所傳云云大己貴命所授也之所
見たる是其祭神御歳神御在坐す證あり本小美
豆那志と訓附たれども美那志にて実生と云る社号
ハや有るむ飛彈ハ山中幽僻の地ハ一今た小稲敷
ハ少き国ハ一有けれハ上古ハ大己貴神と相共ハ御
在坐て掾璫を始給へるありハ非ト一宮
記ハ大己貴命見御歳神也と有れども此神ハ大年神
の御子ハこそハ御在坐けれ右の(飛)大藥ふとの
傳記を惡しく思ひ違へたりけるハこそ神各帳頭注

公但下照准命中赤
名飯皇御命中赤
子御名御在一坐
傳事下御在一坐
飯田之鏡中赤
とせ給へる中赤
作の謂ふれ中赤
歳神中赤御在一坐
御在一坐何方
おとし其從祀中赤
給ふ御事中赤
故お右の加中赤
共い有る中赤

小大己貴命女高照光姬命母高津姬大和国葛上郡
御歳神社同之と云れとも其ハ地神本紀の書入小依
て誤れる者あり抑此神御歳ハ上百下古語拾遺を
引て注せるが如く大地主神の祭らせ給へり神小
こそ御在一坐けれ其神の御子と申すハ甚當らざる
事あり清和天皇実録ハ貞觀九年十月五日授飛彈国
正六位上大歳神從五位下と有る由有て聞ゆるをハ
如何ハ為む但大己貴神も此国小由有る事ハ和名抄
郷名ハ大野郡三枝佐以阿拜波と有ハ神名式ハ大和
国添上郡率川坐大神御子神社三座率川阿波神社見

△同年上月廿日
授飛彈国正六位上
小母国津神御歳
並從五位下

えたるを大三輪神三柱鎮座次第率川社を春日三
枝神社と書て大倭神社注進狀ハ阿波社を三枝御
子社と有をも思合す可一又其率川社ハ狹井神大
貴命荒魂御在一坐由上九下十韓神の下小己の註
を同書ハ倭大魂神亦曰大地主神と有れハ愈其
水無神社ハ坐ハ大年神の御子御年神ハ御在一坐
證ハ成れる者あり又三代実録ハ貞觀十五年
八月四日丙申授飛彈国從六位上氣多若宮神從五位下
元慶五年十月九日甲申授飛彈国從五位下氣多若宮
神從五位上正六位上賀茂若宮神從五位下と有て此

天知迦流美豆比賣ハ必大年神の后神ハ御在坐
ズ一外より事の混れたり一者と所見たり其故ハ
大年神の御子の御年神坐り下の所見たる若年神も
其徳を垂ぐ時ハ必御年神の御子の御在坐すハ得
有よしと理あるハ佗神の御子と有り又上百十引
古語拾遺ハ御歳神之子と云文有ハ古事記ハ更ハ
り地神本紀ハも共ハ其神の后神を載りれず又其御
子神を攀りれざり事甚ニ不審一ま就て思ハ下
羽山戸神娶大氣都比賣神生子若山咋神次若年神
次妹若汝那賣神次弥豆麻岐神次高津日神亦名夏之

賣神次秋毘賣神次久大年神次久紀若室葛根神
見えたる此羽山戸神の御子等の御名を説見るハ御
年神の一年を所知者す御功用を春夏秋冬の四ハ割
て各持別させ御在坐す狀ハ一如何ハ見ても
御年神ありぬ神の御子としてハ甚似著ハ一うぎ
る事あり故其若山咋神ハ大山咋神ハ對ハるハて大
国魂神稚国玉神の例も有レバ此ハ大山咋神の御子
ある可一若年神ハ本より此御年神ハ對ハる神ハ一
て次この例を以云時后若汝那賣神と共ハ神あり次ハ弥豆麻
岐神ハ田ハ水を引ツカする神ハて后神夏之賣神と共ハ

夏を司る神あり秋毘賣神ハ稲の熟しめり事を知り
て秋を司る神あり久々年神ハ地神本紀ハ冬年神
と有る依るハ晚稲ハ冬に至りて成熟る者あれハ其
事を司る神と聞え久々紀若室葛根神ハ家を結ハ葛
藤の神あり此ハ冬に至りて取收めて年中ハ用ふる
者あれハ此二神を合せて冬を司る神と云々も強説
ハハ非下り一如此く稲穀の成始より成終の間ハ
季節ハ当りたる神を一も他神の御子とハ思ハれざ
る事あるハ心を定めて此を考ふるハ羽山戸神ハ山戸
ハ上 百十 大香山戸臣神の下ハ注るカ如ク 山區ハ

香垣山隠れる国秀を云々一其国秀ハ田地の
多くて稼穡の繁き處の事ありけ此ハ自然ハ御年神
の義ハも通へるを以見し時ハ羽山戸神ハ此御年神
ハ一右の羽山戸神ハ御子神等ハ古語拾遺ハ謂内
る御歳神之子と云ふ是ありけハ又其羽山戸神ハ
と申す其ハ保食神の亦御名ハ有ハ謂内ハ御年神
都神ハ坐ハ其ハ御同名ハ此ハ就ハ思ハ出ハ御年神
本生國ハ正月ハ常ハ祀ハ御年神ハ其ハ九日ハ元日ハ
十五日迄ハ棚上ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽
祀ハるハ殊更ハ二月ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽
ハ國ハ春ハ二月ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽
ハ事ハるハ土ハ人ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽
ハ至ハ山ハ神ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽
田地ハ其ハ神ハ年様ハ云々其ハ合ハて越後ハ羽

の同トきを今度ハ田神ガ山神ヲ成給ふト云テ春ハ
迎ヘ冬ハ送ル事ある中ハ田神ト山神トハ一神ハ
時節を以テ其所在を易給ふ申あるト諸天知迦流美
此ハ又少ク思合されハあるト所思内ル
豆比賣神ハ其羽山戸神ハ御母あるト上ハ大年神
ハも后神あるトぬを何よりハ混ル来つゝむト情思ハ
ハ此ハ生坐ト云ハ大山咋神ハ一ト下百五十ハ論定
ハむるガ如ク大己貴神ハ御子事代主神ハ御事あるガ
此第六ノ書ハ謂ゆる三島溝咋姫ト申すハ大山祇神
ノ御女ハ一ト其御母ハ大山罪御祖命亦名高麗神ハ
御在ト坐す事己ハ傳十百六十一九三十三六十四ハ註
ハ如ク一儲此ハ天知ハ記傳ハ訓ハ如ク阿米志流ハ

ハ然ル物ハ此ハ雨知ハ義あり迦流美豆ハ驅水
ハて宇宙ハ水を驅聚めて雲ト成一雨ト降らせ給ふ
由あり此言を説得て見ル時ハ四神出生章第六ノ書
ハ雨龍此ハ於箇美ト有ハ大驅水ハ義ハて万葉二十ニ
ハ天皇ハ吾里ハ大雪落有ハ大原乃古尔之郷尔落卷者
後ト詠せ給へハ大御歌ハ知ハ進らせしれハ夫人ハ
吾山園之於可美ハ言而令落雪之摧之彼所尔塵家武ト
詠せ給へハ如ク此神ハ雨を掌ル神ハて御在ト坐す
義ハ大ハ合ハ者あり此を以テ此女神ハ一ト此ハ取
ざル事あり此彼ト引合ハ事共ハ思ハ合ハ思ハ半ハ

過 あり 記傳の天知ハ彼天飛雁と云意以て地名
輕ハ大和国高市郡輕小因れたる名也然ハ美豆ハ
稱名ハ美豆ハ混れ有ハ未思及ハ可ハ云ハ云ハ
ハズルハ上石の神等ハ其行事を以て云ハ云ハ
負ハ給へりけれ地名を以て御名と為ハ大物主神
の疫氣を鎮給ふ御靈を大和国漆上郡ハ祀りて世ハ
名高き故小曾富理神と申せり如きハ後ハ云ハ伊勢
神出雲神の如くハ其ハ御名ハ非ズハ其所在を
指て申せ 〇奥津比子神奥津比賣命の奥ハ宅内の奥
是あり津ハ例の之ハ通ハ是ありハ常ハ云ハ必
の義あり家ハ奥ハ邊と云ハ海宮遊行章第八一
書ハ乃設三床請入於是天孫於邊床則拭其兩足於中
床則據其兩手於内床則寬坐於真床覆衾之上見元

たる此内床即奥床の事ありハ万葉十三
仁母者睡有外床丹父者寢有ハ有を以知ハ備竈神
小宅の奥を云ハ古ハ今ハ然ハ事ハ人ハ出入する
端方ハ置ハ物ありざれハありハ洲起生章第六一書
小吾己食泉之竈矣ハ申給へりハ其奥まり處ハ竈ハ
有ハ物ありハ推古天皇の大御名を豊御食炊屋
姫尊と稱奉れりハ御食を炊く處を以て稱奉れりハ
其ハ奥深き處の稱ありハ女帝の御名ハ似氣無
まを思ふ可ハ此ハ次ハ此者諸人以拜竈神者也ハ有
ハ竈神と申すハ其物を直ハ指附て之稱ありハ此ハ

其竈を宅内の居置く所を以て御名小夏世奉れり
りけり神名式小能登国^鳳至郡奥津比咩神社邊津比
咩神社有れども其ハ謂ゆる瀛津島姬命邊津島姬命
の御事ハ一て海の瀛と邊と其相對ハたる御名ハ一
て此ハ別神の御在ハ坐す事傳十五三百九ハ云る
如くあれハ此ハ竈神を宅の奥を以て奉奉れりハ
本あり同トさる者あり又記傳ハ奥津ハ地名
小侍りけり時小倭の濱の越語未之詠之遣ハ藤原
忠房君を思ひ津の根郡の鳴鶴の云ハ津濱或書ハ
和泉郡の五と御根郡の御母の云ハ津濱或書ハ
彼同和泉郡輕部御有と御母の云ハ津濱或書ハ
れたる事ハ此程の御名ハ行事を以てハ負
せ奉れ地名を用ふる例無ハ然ハ云べしハ

り予先ハ思へく古今集物名於伎此を流れ出る
方だハ見え火と川沖干む時や底ハ知れむと詠
於伎此ハ煨火と事あるか説文ハ煨盆中火也と注
せる如くハ煨柴薪を以て焼くことハ常ありハ
火を用ふる事無ハ甚ハ強説ハ有ハ今ハ
恥ハ事ハ○大戸比賣神女神ハ此御名を負給ふ
可き由無ハ男神ハ大戸日子神と申す御名ハ御
在ハけむハ脱たる可き事右ハ奥津日子神次奥津比
賣命と相並びて御名あるを唯日子比賣を以て別
るハ思合す可し記傳十二三十九ハ濁音ハ幣と訓
ハ一ハ竈の事あり和名抄河内国河内郡ハ大戸郷
有り姓氏録河内国皇別大戸首の下ハ河内国日下大戸

△播磨風土記
 △粟那飯戸早
 大神 起國之時於
 此處故曰飯戸早
 △抄亦似糟其電
 考之有る方也電
 あり事次の故此
 の文也知る

村と有ハ此郷の事ありと云々之れたるハ大戸を意富
 幣と訓べし證例あり又其六七黄泉戸喫の下書紀
 小倉泉之竈此之誓母都俳遇比と有り閉とハ即竈の
 事あり戸字を書ハ竈を本ハて民戸を也然云故あり
 と云れたる是戸ハ竈ある證據ありあり△儲其幣ハ物
 を煮炊く器ハ之ハ閉と云々也ハ鍋是あり神武天皇己未年
 御紀ハ天皇嘗其嚴荒之粮と有也嚴荒ハて衛ハ炊ま
 たり粮を聞食し由あり事出雲神賀詞ハ伊豆能眞
 屋ハ鹿草半伊豆能席登 荊敷天支伊都閉黒益之と有ハ
 清淨あり兩阿ハ鹿草を敷き忌隱ハ居て嚴荒の尻の

△播磨風土記
 保郡條ハ厨人
 以初荷食具
 等物於是初
 折荷落所ハ奈
 閑落處即ハ奈
 戸津ハ前云
 と見え

焦げ黒し勝り迄日敷を重ねる由あり小思合す可
 後萩ハ奈閑ハ魚菜荒あり古魚をと菜をも奈と云
 其を煮る器を云々と云れたる如くあり和名抄金器
 類ハ鼎和名阿之賀奈閑と有ハ足金荒あり釜和名加
 奈閑云末路賀奈倍と有ハ金荒ハ又ハ金荒あり
 器ありハ別ち云あり鐘鑊子和名比良賀奈傳と有
 七平金荒ハて丸金荒の對あり又仲哀天皇御紀ハ御
 瓶此云弘那陪と有ハ御魚菜荒ハて此ハ金器ハて土
 器ハ抱ハズハて其用を云あり同抄ハ鉞子和名
 佐之奈閑鎗和名阿之奈倍鍋和名賀奈閑と有ハ何

△落穴注物語字は
拾遺等に出たり

後ハルの轉りて竈の名と成べし今も世の云所ハ
竈カマの鍋カマ各別カマの稱有て其竈カマをも鍋カマをも掛て火を燒
く所を閉カマ都カマ比カマとも火處ヒドコロとも云れ閉カマのこを竈カマの名
あるふて竈カマ之方カマと云事カマのや有る也若カマ此カマ雅言カマハ
亡カマあひて俗語カマの方カマハ古カマの唱カマの任カマハ云カマ傳カマふる其カマ正格カマハ
何カマて云カマハ九カマて書典カマハ記カマす事カマハ我カマも人カマも然カマあて各カマ其カマ
心カマハ得カマたる所カマを是カマてし書カマく物カマある故カマハ却カマりて人
の惑カマと成カマる事カマ多カマし殊カマハ我カマハ皇カマ學カマあどい猶カマ更カマあり事
わて考カマ諸國カマの風俗カマを知ら方カマ言カマハ傳カマふる所カマをとり取カマ合カマせ
て考カマさるる火處カマを熟カマく見カマる事カマ能カマハざる者カマあり右カマハ
云カマハ竈カマ處カマを火處カマと云カマハ我カマハ淡路國カマの方カマ言カマハし神
代カマハ火處カマ燒カマあし云カマハ思カマ合カマされ侍カマり因カマ云カマハ今カマ俗カマハ納
屋カマ又カマ部屋カマの稱カマ有カマり老牛餘端カマと云カマハ物カマハ納屋カマハ魚カマをも
菜カマをも皆カマ那カマと云カマハ其類カマを畜カマふる所カマあり故カマハ稱カマハ部
屋カマハ嚴カマ籠カマ火籠カマ釣籠カマ魚籠カマの籠カマあり此カマを本カマとて諸カマの
什番カマを収カマむる屋カマありを以カマて籠屋カマと云カマハありと云カマハ

△落穴注物語ハ此
所の部屋カマの籠カマて
よき極カマ戸カマの籠カマニ
間カマ有カマる部屋カマの籠カマ
酒與カマふと正無カマ一カマ枚
わら部屋カマの籠カマ一枚
口の許カマハ打敷カマて云
空徳祭カマ使カマハ光
方カマつら夕カマ草村カマの
籠カマを聚カマめ冬カマの
と集カマ入カマて書カマす

然カマる又右カマ引カマる記傳カマハ戸字カマを書カマハ竈カマを本カマハて民
戸カマをも然カマ云カマ故カマありと有カマる細書カマハ漢國カマハて民家カマを戸
と云カマ故カマハ此方カマハても民家カマを閉カマと云カマハ此字カマを用カマふる
あり借竈カマを以カマて民家カマを呼カマぶ事カマ今世カマの言カマハも幾カマ竈カマと
も竈數カマとも云カマハ又竈カマが絶カマるあとも云カマハめり又民戸カマ幾
烟カマと云カマハ此意カマありと云カマハ九カマるハ實カマハ其如カマくハて崇
神天皇七年御紀カマハ仍定天社因社及神地神戸カマと有カマる
神戸カマの戸カマ是カマあり仁賢天皇八年御紀カマハ神地神戸カマ口滋殖鳥カマの戸
口ハ戸數カマ口數カマハ事カマありハ此カマをハ百姓カマと訓カマを同カマトク
一繼体天皇三年御紀カマハ百姓浮逃絶カマ費カマと有カマる費カマをハ也

△落穴注物語ハ此
所の部屋カマの籠カマて
よき極カマ戸カマの籠カマニ
間カマ有カマる部屋カマの籠カマ
酒與カマふと正無カマ一カマ枚
わら部屋カマの籠カマ一枚
口の許カマハ打敷カマて云
空徳祭カマ使カマハ光
方カマつら夕カマ草村カマの
籠カマを聚カマめ冬カマの
と集カマ入カマて書カマす

又傍注一欽明天皇元年御紀元年諸蕃投化者安置國郡
編貫戶籍秦人戶數摠七千五百三十三戸同三十年依詔
定籍果成田タノ又孝德天皇御紀元年大化宣造戶籍并校
田畝謂檢覆墾田項畝二年初造戶籍計帳班田收授
之法凡五十戸為里每置長一人其白雉三年凡戸主
皆以家長為之凡戸者五家相保一人為長持統天皇五
年御紀中隨其戸口其上戸一町中戸半町下戸四分
一町猶其餘也多在り如此西戎より未往來以
參未ざり以前も以後も寔を以て戸數を計へ
させ給ふ古法を易させ給はざるもて皆此神代の故

△人家を計ふる
此戸を以て云
來る事小就て火
食の事小就て火
少縁あり神
坐州ありけり

事小依らせ給へる者あり又上小引る姓氏録河内國
皇別
小大戸首中謚安閑御世河内國日下大戸村造立御宅
為首仕奉行仍賜大戸首姓有を解見る其日下
地御宅倉を造れる其御宅倉の民の戸數多く殖
たり故を以て大戸首姓を賜へるもて大戸村と云も
其戸數の多きも因て後小出來れる名ありけり此を
以て考ふるも故此大戸比賣神と申す其日子神を以て
其大戸と申す故を
共小遍ぬく天下の人の戸を掌らせ御在坐す謂ふ
りけり次小此者諸人以拜竈神者也有係て心得
べくこ上件大年神より以下の神の即功用を今
定説承れる如く先其大年神ハも亦名を

宇迦之御魂神と申奉りて想ての御魂神御在
坐せは其別向の御魂神向飯の命命稲生御命の
義あり其命子向飯神向飯の命命稲生御命の大
香山戸臣命山向飯神向飯の命命稲生御命の大
廣給ひ與津日子與津比賣二神御田神ありて未稼を
戸と申奉る御功天下の戸を普く守りて人民を溢り
大神等給ふ御功坐す神と聞え何れも甚止事無
在坐けし御○諸人ハ万葉二四十三諸人之悞流麻
低尔一云間五丁十六小母呂比得波家布能阿比太波又
丁ハ毛呂比登能阿羅夫遠美禮婆十八二十小毛呂比
登宇伊射奈比多麻比也有り御紀小諸神又衆神又群
神を母呂迦微と訓る小目ト○以拜ハ記傳十二三丁
小母知伊都久と訓べし上ハ阿曇連等之祖神以伊都

久神也又曾飛君等之以伊都久三前大神者也中卷伊
邪河宮段ハ近淡海之御上祝以伊都玖天之御影神云
云玉垣宮段ハ若坐出雲之石碯之曾宮葦原色許男大
神以伊都玖之祝大延字など有と同ト狀あり
又御天降段の拜祭佐久久斯侶伊須受能宮を也伊都
伎麻都流と訓べきあり補と有カ如ト猶拜字を伊都
久と訓る例ハ明文抄ハ載了大倭本記ハ今伊勢国磯
宮崇敬拜大神也又今卷尙穴師社宮所坐拜祭大神也
と有る是あり但石の崇敬拜と拜祭も外ハ訓べき言
護日護斎奉大神と有る尙奉ハ伊都伎○竈神ハ禁秘
麻都流と訓より外無を以て知べし

△後ハ

御抄小謂内る竈神の御事あり此の諸人以拜竈神者
也と有ハ右の擧たる阿曇連等之祖神以伊都久神也
曾取君等之以伊都久三前大神者也と有る如きは其
志加海神社又宗像神社あり社の有て氏人の仕奉れ
るありは事の限りて有るを此の諸人以拜と云ハ
上は朝廷より始奉りて下庶人に至る迄家毎に此を
斎奉れりてを以て廣く諸人といふあり朝廷の御事ハ
申奉るも更あり江次第あり聞白家正月元旦の四方
拜あり此神を拜する由見え世衆人儀も竈神を
拜する事の有を以て此の合るを知べき者あり又記傳

十二四十の竈ハ加麻と訓べし和名抄燈火器の竈
附四聲字苑之竈則例及典蹟炊爨處也文字集略云竈
七經反和竈後穿也人居宅具ハ唐韻之竈音遙揚氏漢
名久度良加燒瓦竈也字鏡ハ竈羊招反平燒瓦竈也と有れ
萬又作陶須惠加万ハあり又加度麻とも云ハ竈處あり万葉五三十ハ可麻
度柔播火氣布伎多豆受と有り又閉都比之古
神樂竈殿遊歌ハ止典戸川比と見え枕草紙ハ御閉都
比と有り又竈を久度と云ハ誤あり和名抄の竈竈後
穿也と見え竹取物語ハ竈を三重ハ為隠コトて云云久度
を穿てと有り然れば古の竈ハ後小穴を開て其を久

今指十度神の
事を説くを見合
すべし

度といふ一あり儲憲字ハ字書ハ見え若くハ窓の
誤り窓ハ窓と同一竈突也と注せり又大膳職式ハ竈
神と云有れば其と同一くて竈の誤り云れぬ(委)
又云く今俗ハ釜をカ加麻と云故ハ竈をカ加麻と云ハ
釜より出たる名と思ふ人ハ有れ然ハ非ず古釜をカ
麻と云事無ク釜ハ賀奈閉又未路賀倍と有り思ハ
混ハ可り事と云ハ賀奈閉又未路賀倍と有り思ハ
式ハ筑前國御空郡竈門神社名神大藤原經御歌ハ
詞ハ竈門の明神と有り新續古今集ハ見ハ百練抄ハ
伊國名草郡竈山有て竈門山ハ拾遺集ハ見ハ此ハ
伊國名草郡竈山有て竈門山ハ拾遺集ハ見ハ此ハ
神社ハ傳ハ五巻ハ四百三十三ハ下ハ注ハ然ハ右ハ
ハ五瀬命ハ御座り坐り給ハ所思ハ由無ク又紀伊國
故ハ有ハ唯ハ地各ハあり又記傳ハ云ハ續紀ハ天平三
竈山共ハ唯ハ地各ハあり又記傳ハ云ハ續紀ハ天平三

今忌火神を内
膳司ハ属ハる

年春正月庚戌朔乙亥神祇官奏庭火御竈四時祭祀永
為常例と有る庭火御竈二神大炊寮内膳司ハ坐す神々也文徳天皇實録ハ斎衛
二年十二月丙子朔大炊寮大八島竈神斎火武主比神
庭津皇神並授從五位下と有る是即斎庭火皇神
と共ハ御座り坐る庭火神ハ内膳司の神也ハ上ハ三字有りハ脱ハ可ハ天智天皇十年御紀ハ大炊寮
有ハ八鼎と有る是ハ竹取物語ハ大炊寮の飯炊ハ屋
の云云ハ島の鼎ハ有れば右ハ御竈神と申すハ足
鼎ハ御座り坐るハ同録ハ天安元年夏四月戊
辰朔癸酉有勅大炊寮大八島竈神内膳司忌庭火神
並授從五位下と有る此神階二度共ハ同ト五六疑有

れども此ハカテ忌火庭大神を内膳司ハカテ祭れり事
知小ハカテ此ハカテ清和天皇実録ハカテ貞觀元年正月廿七日甲
申奉授大膳職從五位下火雷神大炊寮從五位下大八島竈
神八前斎火武主比神内膳司從五位下庭火皇神從五
位上と見え同九年正月廿六日丁卯授内膳司從五位
上庭火皇神從四位下陽成天皇実録ハカテ元慶二年七月
八日辛丑後内膳司從四位下庭火神從四位上と有り然
るハカテ下百引中右記ハ内膳司御竈神三所也
と有れハカテ其庭火皇神と申すも御竈ハ御在ハカテ坐るを
此ハカテ御在ハカテ坐る桑常の御竈と聞えたり然

れハ同ハ御竈神ハ御在ハカテ坐せとも大炊寮ハ御
在ハカテ坐す御名を大八島竈神と称奉り内膳司ハ御在
一坐す御名を庭火皇神と称奉りて兩所共ハ忌火神
と相並ハカテ鎮坐るハカテ有ハカテけるハカテ又ハカテ大膳職式ハ御膳神ハ
座中警院高部神一座中竈神四座中菓餅所火雷神一
座中害神四座中右四祭奉料依前件秋亦准此但御膳
神二月十一月上酉日祭之と有ハカテ此ハ神各式ハ大膳
職坐神三座中御食津神社中大雷神社中高倍神社と見え
たりハカテ此ハとも竈神四座害神四座ハ式外ハ其職
ふて被祭るのハカテハ神祇官よりハ預ハカテめ事あり可

公皇日連 并令
父鎖天此并忌
火止為天伊波此
麻用天供御食
并

御竈祭云之中宮御竈祭東宮云云鎮竈鳴祭云云云と
有り此等ハ大膳職式等ハ所見たるトハ異あり借
竈神ハ如此ク公家ハ祭給ヒ又古より諸民迄モ各
祭ル一事此記文ホテモ知ベク江家次第元正元旦四
方拜條庶人儀ハ竈神をも拜む事見也云此ハ借此
より立返りて右ハ天智天皇御紀ハ大炊寮八島勝鼎
ト書され其を後の御紀共ハ大八島竈神ト稱奉ル世
給へる神名の御在リ坐て掛まくハ恐ク天神御子の
大御食國ト所知ハ者す此大八洲國の号を冠ふる世
奉る事ハ高橋氏文ハ天八洲ハ像天八字止古八字止

咩定天カミイサケ神齋大嘗等奉仕奉始支有る意味ホテ甚ク深
キ所縁有る御事ト所見たり借古ハ大御世ハ御竈
神ハ其止事無キ御政ト為させ給へるハ天下ハ貧
福ハ就て其者明キ者ハ炊烟あるを以て其炊烟の高
ク立升る事をおむ無上キ愛キ例トハ成せしけり故
此天御饗殿ハ是哉所燧火者於高天原者神產巢日御
祖命之登陀流天之新巢之凝烟之八拳並摩豆燒攀地
下者於底津石根燒凝而ト有る是ホテ即皆竈ハ係レ
事あり故仁徳天皇御紀四年ハ朕登高臺以遠望之
烟氣不起於域中以為百姓已貧而家無炊者同七年ハ

天皇居^三臺上而遠望之烟氣多起^中百姓自富歟と有る
二度の詔勅も炊烟の多少を以て民戸の貧富を所知
者させ給へる趣^古にて天皇等、時々巡狩の御事御
在し坐て其御迹をば學ばせ御在し坐けし一万余一
十々天皇登^三香具山望^三國之時御製歌山常庭村山有等
取^三典呂布天乃香具山騰立國見字爲者國原波煙立籠
海原波加萬立^自多都何^自怜國曾蜻島八間跡能國者之有
も上ある仁徳天皇も同し御心掟の大御政も御在し
坐す御事をあむ見奉り知べしあける其五十三ある
貧窮問答歌も可麻度柔播火氣布伎多豆受許之伎尔

波久毛能須可伎豆飯炊事毛和須礼授と有る甚く貧
しき事の極もあつを以て竈神の御恩頼の大なる事
を知べし^此熊襲^之不^思ふ^景行^天皇^十二^年御^紀の
月甲子朔戊辰到^周芳^磨時^天皇^南望^之詔^群卿^曰於
南方烟氣多起必^賊將^在則^留之^先遣^之令^察其^狀給
有る其烟を望むを御在し坐て人家此や在むと詔給
へる書ぬを申す物あり其朝貢せざるわ^國の貧^一ま
由あどを申す物あり其朝貢せざるわ^國の貧^一ま
起れるを以て其事を判断せざるわ^國の貧^一ま
ハ異ふり給へる事又朝廷にて此御竈神を祭る也
定めし例共の事備又朝廷にて此御竈神を祭る也
給ふ恒例の御政ハ四時祭式六月祭忌火庭火祭^中
此云右大殿祭畢宮主於内膳司行事之有る此神今

食小就て被行りしあり十一月祭小忌火炊殿祭略中右
 新嘗祭時先新造炊殿依件鎮祭略次小供新嘗料略中右
 依前件其御贖大殿忌火庭火等祭料並准神今食之有
 其忌火炊殿小被大八島神思不可又每月朔日
 忌火庭火祭中宮東宮庭火准右宮主於内膳司行事但
 東宮於主膳監行之と有る石寄の庭火神也即竈神小
 御在一坐す事已小上注り又齋宮容式小忌火庭
 火御竈井神祭遷入野宮之初所祭毎云云朔日庭火祭
 野宮齋云云又鎖新造炊殿忌火庭火祭略中座一人取
 城国愛宕郡鴨取同国葛野火炬二人郡秦氏童子と見えて大抵ハ
 縣主氏童子

合吉神並秘
 竈記小大宮竈
 殿奥津彦神是
 也大年神街見
 也諸人家竈
 殿神是也と有
 り右の事と云
 かり若て又

朝廷の御式小同トく齋院司式中も忌火竈神祭料略中
 右神祇官直移所司請取令宮主祭亦有る此を以て
 此小諸人以拜竈神者也と云ハ上朝廷より始奉りて
 下万民の係る事を明く可上明月記建久十年四月
 廿日條今夜宅神祭略中件竈神日未座防門去廿七日
 渡此宿所坤方と見ゆ上家神祭と云ハ其を兼て件
 竈神と云あり此を以て嘗昔其竈神を指て家神と
 云を知べし然るハ上百四十大戸比賣神の下注せ
 しが如く民戸を開て云以戸敷を竈敷と云る如片皆
 此竈を以て人家の竈と為る事あり竈の竈神を

と家神とい謂つ可き者ありり。貴嶺問答の宅神
 と書て夜加都神と訓る。即家津神の義あり。土御門院
 御集の柏木の森の下葉を折敷て宅神を祀る。頃哉
 と詠せ給へる。い決く右の電神祭あり。木工頭為忠朝
 臣家百首の神祭を親隆梅柏其八平午を午折つ。宿
 の閉都比の供へつる哉。と詠。忠見集の四月家の神
 祭る。年毎の祭るむ敷。伎祢る見む載く髪白く
 迄。と有れ。其宅神を謂ゆる電神を祭る。必四
 月の中ふ吉日を取て行ふ定りと見えたり。拾芥抄の
 日と有れ。何日と云事を書さず。但右の證共。有て
 慥ある事あり。有れば四月ある事論を持。又古歌の

四月を神祭る月と云。卯花又ハ新樹を詠合せ
 たり。思ふ。四時祭式。四月祭。大忌祭。凡神祭以下
 諸祭。有て。実の諸社の祭事。此月ハ在る事あり。と
 其ハ限の有て。扱きを宅神祭。此月ハ在る事あり。と
 あり。可けれ。其事ハ就ての終あり。天下奉りての事
 あり。可る。あり。猶下ある。庭津日神阿須波神。波比岐神
 の下。あり。注す可し。○大山咋神。此神の御事。此ハ大年
 神の御子と爲る事。全く傳の誤あり。己の傳。十二
 七丁百十五。三百五。の注せる。が如く。大己貴神の御子
 七丁百十五。十三丁。の注せる。が如く。大己貴神の御子
 事代主神の御事あり。て御祖ハ謂ゆる。胸形中都大神
 の御在り坐て。此松尾日吉賀茂三處ハ鎮り御在り坐
 が。此松尾の御事ハ二十二社注式ハ一座大山咋神
 也。一座胸形中都大神。市杵島姫也。と有る。是あり。日吉

小てハ大比叡神と申奉りて御父大己貴神を大比叡
神と称へて其ハ大宮小坐一此神ハ二宮小御在一御
祖ハ三宮小渡りせ給小賀茂めてハ神名式小謂ゆる
山城国愛宕郡賀茂別雷神社亦若雷名神大小御在
坐て其賀茂御祖神社二座並名神大月小御祖玉姫命
即胸御父大己貴神と共小御在一坐て右の如く松尾
日吉賀茂の三社小御在一坐るが松尾めてハ大山咋
神日吉小てハ山末之大主神賀茂めてハ別雷神と申
奉り来り故小皆別ある神の如く思違ひ誤り来るを以
て此三社の御事小於てハ古より一人として正さ

説をあむ得ざりける先別雷神大山咋神ハ同神ある
事あり明らめて後其説ハ及ぶ可し先注式賀茂條ハ
鴨号下御祖神玉依日咩別雷神御母賀茂号上別雷神一
座として次小素戔嗚尊大己貴神大山咋神と云ふ
神系の事ハ及べり其ハ此古事記舊事紀を知さる大咋神
非ず又山城風土記を下ヤ奉あがく打替りて別雷神
を大己貴神の御子と為る事必兼る所無くてハ全小
云れざる事共ふれハ中ハ古傳ある證あり二十二
社注考信賀茂下社御祖命別雷神上社大山咋神松
尾日吉同体と有と右小同ト紹運録ハ大山咋神別雷

又神社考詳節
 小松尾大實元年
 奉都理始立松尾
 神殿号曰大山咋
 神是比叡山是古
 之同体也と有之
 宮記小賀茂別宮
 神社之十官記大
 山咋神也と有之
 参考小可一神名
 式ふる上野田
 郡賀茂神社を
 頭注大山咋神と
 有之社傳の古説
 可き事云と更
 多利

八百萬神系圖の大山咋神別雷神松尾神也又神系圖
 の大山咋神別雷神山王二宮と見え(乃)は是右の云る
 三社同体の據是あり然して和漢三才圖會の山城國
 松尾大山咋神大己貴と有る是胎形中都大神と相並
 ひ御在し坐し合ひ神社啓蒙の引る神系圖の素戔嗚
 尊孫大國御魂命見大山咋神松尾大明と見え神佛冥
 應編の大山己貴命及其子大山咋命並祭也と有ふど何
 れも古記の趣と相違ひて此大山咋神ハ一と云
 く大年神の御子と有を知らざる大己貴神の御子と
 書せるハ必然る可き所由無うむや必其受る所

ふむ正か有べき事ありける但氏成私記と云物ハ松
 有ハ誤れり備此別雷神の御事ハ就て山城風也と記
 小甚紛ハハ一き事あり有ける然ハ鴨建角身命丹
 漫國神伊賀夜比賣生子ハ娶て生給へる御子ニ柱坐
 る兄を玉依日古次を玉依日賣と云其玉依日賣命
 石河瀨見小川遊ひける時丹塗矢川上より流下れ
 了其を床邊の置たりハ美男子と成れりハ娶て
 生給へる御子坐り其御子屋の薨を穿ちて天小上り
 御在し坐し御子坐り別雷神と書せる事ハ有れども
 其の旧記ハ山本坐天神御子と申せるハ別雷神ハ
 謂ゆる片山御子神社是ありて大山咋神ハ別雷神
 の御事と誤来れりあり此大山咋神ハ別雷神と申す
 ハ其雷字ふとハ似てしも着ぬ別の事あり思混ふ
 可う若て其大山咋神別雷神共の事代主神ハ御在
 一坐す證ハ神社本記御本殿ハ松尾大山咋神事代主
 命社家傳曰一座と云て事代主(生)命を合祭する事極

秘也之れども極秘ハ有べし其所由の知る
れざるゆこそハ有けぬ右の二神ハ同神ハ御在坐
依て一座ハ為れぬ其大山咋神と申す御靈
事代主命と申す御靈と一神を別て二柱ハ並祭れ
るあれど其神ハ異り無が故ハ一座ハ祀へし由
りけり是松尾ハ事代主神ハ御在坐す證あり又洞
院公定公の尊卑分脈ハ事代主命近江国日吉二宮号
小比叡大明神と有ハ右ハ引る神系圖ハ大山咋神別
神山王ニと有ハ合て即吉ハ事代主神ハ御在坐す
宮云ニと有ハ證あり賀茂ハ元曆奏上記ハ自神代所

鎮上社事代主命下社大己貴命而已故有別叡土山之
名也中略欽明天皇廿八年四月中自大和頭言則上社事
代主命下社大己貴命而已中略凡土記載丹塗矢是皆大
己貴命之故事而已以松尾社共預酒祭者大山咋神而
大國御魂命之子下略と見え異本舊事紀ハ味鋺高彦根
命針問室神社山と見え出雲大社小縁起ハ山城國賀
茂大明神當社第一皇子阿式大明神也と有る當社ハ
大己貴命ハ坐一阿式大明神ハ味鋺高彦根神の御事
あり是賀茂ハ事代主神とも味鋺高彦根神とも申傳
たるゆて上件松尾日吉と異ふざる確證是なり如

又若狭國神志帳
小遠敷郡一佐賀
茂大明神と有る
此賀茂社司より
祀る社ありと社
記ハ事代主命と
云り

此く彼此其事實の打合て少くも違ふ所無き上ハ大
山咋神ハ一も愈事代主神の御事ハ一も御父ハ大己
貴神御祖ハ胸形中都大神ハ一も即市杵島姫命ハ御
在ハ坐す事實ハ正ハ一も者ナリケリ又神佛眞應編ハ
上賀茂宮味耜高彥根神中宮大己貴神下賀茂宮宗像
姫神也ト云テ右ハ小舉たる傳共ハ合ヒ又摸津國比
賣許曾神社記ハ雀宮神社祭神ニ座別雷命飯豐命下
照媛別稱也勸請奥州白河郡仙谷郷美ノ有テ此下照
媛命ト相並ベテ別雷命ト味耜高彥根神ト事代主
命ハ坐すハ叶ハズ思ふ可ク此御神ハ御事ハ如
傳十卷之百五十四丁十五卷二百十八丁ハ注ス如
神ハ御事ハ坐すハ事代主神ハ一言主
神亦ハ別雷神ト和魂荒魂神ハ御事ハ坐すハ大山咋
主神ト申サズ共備別雷神又大山咋神ト聞ユル共
違ヘルハ非ズ

別雷ハ山城志ハ賀茂山一名分土山又神山ト云ハ又
松尾山一名別雷山ト有テ此ハ次ハ云々如ク此神ハ
山を分け水を通シて國作給ヒ一御功用ハ依ル御
名あり大山咋の咋ハ景行御紀ハ謂ユル春日穴咋邑
の咋ハ穴の通れヲ云ハ聞え又攝字を久比ト訓モ
地を穿ちて木を通す意又物を食ト云モ俣内ハ通シ
入るハを云ハ然レバ此ハ其時ハ龜山荒山を割分て
水理を通シ給ヘリ一御所為ハ因ル御名ある者ナ
リ神名式ハ丹波國桑田郡松尾神社今保津村ハ御在
一坐る此別雷田社ト云メリ神代系圖傳ハ丹波國淳

ハ云ハ又或言ハ別雷
坐す本殿成亥十
所計山上此所有
此即当社神降臨
所ありとも
傳三十五丁ハ奉
注サテ奉ルハ丹波國
請田社傳記ハ遠近
丹波國湖也大山咋神
決其水通而後為家
柳及田也於是面皆
此神德祠之以於桑田
淳田明神ハ助為神
休ト云ハ山城名勝
志ハ以助為神体社
坐丹波國保津邑淳田
明神ト有正一傳
ハ一也即

大山咋神決丹波國
湖水通而成土木以
助為神体者山城
國松尾大神也
是元又一本ハ

一見之羅山文集
 七又有注由明神祠
 世傳遠古之世丹波國
 皆湖也其水赤故曰
 丹波大山咋神穿岸
 田決其湖於是丹波
 水枯成土乃遠伺而初
 之以鋤為神之主此
 神即是松尾大神也
 由雲州大己貴神行
 此則始到此則為此則
 也鴻水懷山濁懷排
 宜改神鎮八神南方
 到里柄嶽視水跡地
 勢逆流西下矣今水
 戶峠是也東方見
 山狹可通水而鑿山
 勢逆流決之神
 始取鎮成此則里給
 依之崇奉号鋤山大
 神也

田明神者大山咋神也遠古世丹波國皆湖也其水赤故
 云丹波大山咋神鋤其湖水水涸成田矣是以用其鋤為
 彼神之靈体此神者即松尾大神同体也其水記也赤故
 云丹波こま字小就て設たる言ふて信ふれぬ其水
 ハ甚愛たき古傳あり又同郡鋤山神社の社傳然り
 予友小泉保敬其兩社の古傳及松尾社記と桑田郡の
 土俗の傳ふる所を纂めて文を成せしり昔大己貴神
 領大山咋神及諸神而到行丹波國此國者鴻水懷山濁
 浪排空故大己貴神及大山咋神南方登里柄嶽視水脚
 地勢逆水西下矣今水戸峠是也大山咋神又東方見山

狹可通鑿山劈磐順流決之亦穿浮田為家郷於是水涸
 為土田地始豐饒也是時此神等自取鋤鐵以成此功給
 依之崇奉号鋤山大神又以鋤為神之主祠大山咋神而
 稱桑田請田神故其所鑿山者葛野之荒子山松尾是也
 又其片端者即龜尾山是也又其所通之水者即大堰川
 是也又其松尾山別稱分土山此之縁也故其大山咋神
 者即坐松尾山也此後參考と書せり其傳ふる任不書取たる故
 小文こそ拙りけれ其事實小於て甚目易くて
 宣一右等の傳々の如く實小古ハ湖水ぬて有一故小
 松井郡小今も水戸峠と云有て今め如く山城國小ハ

公神名式に調ゆ
其主神社此並ませ
給へるを答ふ

流れずして天田郡を纏て丹後国由良川に落たりし
あり其黒柄嶽ハ今氷上郡小黒井と云て合樂師の神社
其神一して御在し坐る是ある可し若し山城と丹
波の堺に在る山を穿ちて水を通し給へる是即大井
川なりて此より始て丹波国ハ出来又山城河内摂津
と其の孰て水理調相通ひて大田園の墾開けむ事
申すも更あれハ大山咋神と申奉る名義ハ右に注せ
るが如く山を割分て水を通し給へる御功を以て稱
奉れる者ありけり又錫杖を神体とし錫杖山大神と
稱奉れるを思合す可き者ぞ
但此ハ也き丹波国ある故ハ然古事ハ傳はり神社
と尊く祭られ給ふゆこそハ有けれ其外ハ諸国ハ

合禮を山本と云ふ
對ひて上方の事
あり

ても斯る類の御事ハ何千萬り御在し坐けむ此一事
ハ限たる御事ハ努思ふ可うとず此神の水理の事
ハ孰て功を成し給ふ所也己ハ ○山末之大主神記傳
傳十一卷三十九丁云云
十二丁云山末と云公大被詞小国津神波高山之
末短山末亦上坐伏高山之伊穗理短山之伊穗理字檜
別氏所聞食武之云高山末短山之末其佐久那太理尔
落多支都速川能云云万葉十三丁云三諸者人之守山
本傍者馬醉木花開末邊者橋花開浦妙山曾泣見守山
濱松中納言物語ハ何を頼し所にてうハ甚如此便宜
無く侘しき山の末ハ過す可うとむと云云云と有
り但此の山末ハ地名のても有むうし式ハ伊勢国度

志九又申志九御
正宮依神感御詠哥
喜幸より琴御館
小詩いれて此山末
留る松風依御詠哥
琴御館神位号山
末大明神社壇大
宮東殿建之矣と

會郡山末神社有り神意と云れり但地名の非ず實也
山麓を万葉九一丁小射行相乃坂上之踏本カカノと作る
其踏本フモトと作る即其正字のて或ハ山本と云ひ又ハ
坂本と云る其本の對ひて其峰を云て此ハ即此神の
敷坐す所と宮定め御在り坐す日枝山是ハあり日吉神
道秘密記小山末琴御館字志九神位是也上古大宮廻
廊内御殿東建社と有ハ此山末社ハ二宮中御在り坐
す大山咋神の亦名の渡り世給へるが此ハ大宮の鎮
り御在り坐す文己貴神の御社の傍にも其御靈を別
の祀祭れるありむが此ハ一の論有り右ハ琴御館字

其秘密記中七
社の神階を云る
次ハ山末社正一位
と有るを以て此
縁あり神位
と知べし

志九神位是也と有る此人ハ其始ハ當社氏祖始也と
書りて初て當社を祀れる事ハ時と云る其事より及
びて誤れりぬと有べき此山末之大主神ハ一も神代
より御在り坐す實ハ當社の始あるを社氏の始て取
違へて終ハ此山末社を一も氏人の靈社と成りけ
る者ハ所見たり然れば此山末之大主神の御在り坐
す秘區ハ此山頂ハ在て其御靈ハ即此山末社小て
と有けりし猶思合す可ハ其山末社の事を云る次
之字掌内書之祈念事云ハ本社建立之初祭礼之始也
社典利起也と云るハ廣田社の事なれども其社を本
社建立の神位祭礼ハ始ハ是より起れり云む事
甚其謂れ無き事あるハ右ハ山末神の事ハ就て云事

あるを其山末社の傳を矢ひて終ハ其隣ハ此ハ其始ハ社
か附たるかゆぬど此も却りて山末神ハ此ハ其始ハ社
鎮坐る証ハ成ぬ可ハ事あり但ハ二ハ社ハ注ハ式ハ廣ハ田ハ
神社條ハ住ハ吉ハ廣ハ田ハ八ハ階ハ南ハ宮ハ八ハ祖ハ神ハ有ハ其ハ南
宮ハ下ハ松ハ尾ハ大ハ山ハ咋ハ神ハ南ハ宮ハ嚴ハ島ハ明ハ神ハ宗ハ像ハ明ハ神ハ其ハ南
山ハ末ハ社ハ此ハ大ハ山ハ咋ハ神ハ其ハ社ハ御ハ左ハ坐ハ思ハへハ此ハ始ハ
を此ハ末ハ社ハ此ハ大ハ山ハ咋ハ神ハ其ハ社ハ御ハ左ハ坐ハ思ハへハ此ハ始ハ
得ハ爲ハたりハ廣ハ田ハ社ハのハ係ハてハ云ハハハ右ハのハ山ハ末ハ社ハのハ事ハをハ僻ハ心
者ハとハこハそハ大ハ主ハ神ハとハ申ハすハハハ字ハのハ如ハくハみハてハ日ハ枝ハ山ハ也
御事ハをハ地主ハ大明ハ神ハ天神ハ第一ハ尊ハ神ハ天地ハ初ハ之ハ神ハ是ハ也
とも又ハ小ハ北ハ敷ハ大明ハ神ハ天地ハ開ハ闢ハ之ハ神ハ諸ハ神ハ惣ハ大ハ祖ハ神ハ是
也ハ有ハるハ地主ハ大明ハ神ハ大ハ宮ハ御ハ父ハ神ハ坐ハせハとも後
小鎮坐ハりハかハてハ神ハ代ハありハ此ハ山ハのハ御ハ左ハ坐ハてハ此ハ地ハのハ地

主と申せりハ唯ハ大ハ山ハ咋ハ神ハのハ御ハ左ハ坐ハをハ以ハてハ然ハ称
奉ハれハるハありハ但ハ天神ハ第一ハ尊ハ神ハ云ハ天地ハ開ハ闢ハ之ハ神ハ云ハ
と云ハ妄ハ説ハハハ此ハ地ハ主ハとハ云ハ小ハ就ハてハ起ハれハるハ者ハありハ却ハり
てハ此ハ地ハ主ハ神ハ大ハ山ハ咋ハ神ハのハ事ハをハ徴ハすハ種ハありハ成ハれ
りハけハりハ日ハ吉ハ行ハ章ハ記ハのハ二ハ宮ハ權ハ現ハとハ申ハすハハハ云ハ荒ハ金ハの
地ハをハ領ハしハ給ハひハてハ万ハ物ハをハ生ハ育ハ神ハ代ハのハ當ハ昔ハありハ此ハ宮
小住ハ給ハひハてハ波ハ母ハ山ハのハ主ハとハ成ハ給ハひハ故ハ小ハ地ハ主ハ權ハ現ハとハ
申ハすハありハ有ハるハ國ハ常ハ立ハ尊ハ小ハ云ハ書ハれハるハありハ此ハ
も上ハとハ同ハくハ大ハ山ハ咋ハ神ハのハ此ハ地ハ主ハなるハ證ハとハ成ハへ
すハのハ或ハ書ハのハ貴ハ船ハ與ハ御ハ前ハ所ハ祭ハ奉ハ代ハ主ハ命ハ也ハ本ハ朝ハ地ハ主ハ神

公卿ノ事家物語
山僧ノ神像を撰奉
る時ノ言ハ諸王山王
と云ハ爾王ハ大宮ノ
神ト坐一山王ハ此山
末之大神ト坐一山
王ト坐一山王ト坐一
神ノ御事ある故其
山王ト坐一山王ト坐
神社ノ事ハ成ル
あり又日本風
工記ト云ハ

又有不甚謂此有_レ事_レゆ_レ諸神鎮座記の丹波神社_也
江国滋賀郡坂本村日枝神社者大国主大神也_{大己貴}
也_名自神代兒大山咋_{大マス}神化遊_ス此處以此山為六合本狂至
豐浦宮天皇時大神辭之返父大神替栖以葛野為鎮祠
山城国松尾神祠是也_也有_レ神代より此處に御在_レ
坐て此山を以て国中の鎮めと成させ御在_レ坐_レ由
ゆて即本朝地主神と申す所以此に在_レ又山末之大
主神と申奉る所以此に在_レ事あり神名秘抄山
末御玉命一名大山咋命又山末大主神是也_也有_レ然
れに別山末御玉命と申す御名も亦御在_レ坐_レける

小こそ_也但山末之大主神又_也御玉命と申たれ_ハ
其慶より及_レちて地上の事を主宰_ス給ふ由あり
又山末御玉命と申すも其山靈と申すも非_ズ其山
末の御在_レ坐_レて四方の御靈を掌給ふ神に坐_レす_也
り_也或説ふ山末の山の尾の無_レなる_也狀_也に_也坐_レす_也
云て尾崎あご云_レ山同_レド_レ可_レし_也云_レ右の大枝
詞_也な_レど_レ語_也の_也続_也き_也を_也だ_レ味_也ハ_レ知_レさ_レる_也あ_レれ_ハ其_也
云_レわ_レも_也進_也淡_也海_也国_也記_也傳_也十二_也
足_レず_也三_也丁_也小_也和_也名_也抄_也の_也進_也江_也知_也
加津阿不三と有り遠江に對へて近淡海と云へど
も古も今も常の阿布美との云_レり故師に此記の
近字有_レ後人の加へたる_也と云_レたり_也見_レ内_也然_レれ
とも唯の阿布美との云_レハ其土人の唱ふる所や
て其遠江止保太阿不三と云ふ_也とも他国よりこそ_ハ

其遠近の言を加へざれば分き難うりけれ此も其国
のてハ遠字をば加へざりつと見えて神名式ハ遠江
国磐田郡淡海国玉神社と有て近淡海と書ざるハ其
国ハて云と佗より云との差別ハ必有つる者と所見
たり故佗国よりして其国を指してハ必知加都登
富都と云別ベヨ事あう近江の海ハ外の並無して
イホ其大ウリホバ打任せて阿布美と云へハ其国の
事と人皆心得る事と成れるあれハ此記の近字ハ
後人の加へたる者ハ得あむ云ホウリける○坐
日枝山ハ地神本紀ハ坐此叡山ハ作れり神名式ハ

近江国滋賀郡日吉神社名神大と有る是なり臨時祭式
ハ日吉神社一座比叡神同と所見て官より祭らせ給ふ
ハ一座あれども記傳ハ引れたる三代実録ハ貞觀
元年正月廿七日甲申奉授近江国從二位勳一等比叡
神正二位從五位下小比叡神從五位上又元慶四年五
月十九日壬申奉授正二位勳一等大比叡神正二位從
五位上小比叡神從四位上と有れハ古より祭る所ハ
如此く二神ハて御在り坐せども其祭りを一座とし
て行給へりハ佗ハ例多き事あり大備此叡と云ハ世
小云ふ比叡山是あり小比叡と云ハ親書便蒙ハ或云

小比叡者謂曲塔横川之中間也と云る是あり偕日枝
ハ懐凡藻ハ裨叡ハ作り小右記ハも比叡御社ト有レ
其唱比延叡ある事伊勢物語ハ比延叡の山を廿許ハ重ぬ
たふ玉様ハ云レ大和物語ハ何許リ深クも非ズ尋
常ハ比叡を外山ト見ル許あり古今六帖ハ昔吾ガ言
出テハ為レ一比叡の山心弱クも歸ル物ハ曾丹集ハ
大比叡ヤ小比叡の山ハ秋暮ト遠目ト見エズ霧の芭
小野恒集ハ比叡ハ山苗ありぬ草取返ハ植ハ田ハ比
延ハ止スも生ハける哉ト有を始ト一ト猶此復有り
記傳十二四下ハ拾遺集ハ比叡社ハ詠侍ハ願ギ

掛る日枝の社の木綿襪草の片葉も言止て聞け偕後
世ハ比叡山ト云ハ延曆寺の事ト心得日吉をハ
比余志ト唱へて別あるガ如クハ成れり古人日吉ト
書ルも比叡ハ比余志ト云事ハ更ハ無一住吉ハ古
ハ須美能延ハ須美余志ト云事ハ無一ト同ト事
あり又最澄僧此山ハ佛寺を建て此神をも其寺の守
神の如クハ成レて山王ト云名をさハ負せ奉リつれ
ハ今世ハ至りてハ其比余志ト云名ハ隠れて唯山
王トのト申すめりト甚ク慷慨トて歎息の意を述
れたるハ實ハ然ト言あり或書ハ引ル山門堂舎記ハ

公のり注式
山王之事
三代嵯峨天皇弘
仁十年始崇敬之
と云れども
杜撰なる可き者

小哉たる延喜十二年五月五日牒延曆寺符小右為地
主山王一切神祇と見え百練枚長和元年六月條山
王御崇と云事も有て古き事あると此稱ハ一も此山
末之大主神ハ一も神代より以降此日枝山の地主ハ
御在ハ坐を以て本ハ山主と申けむを字を換て山
王ハ申来れどもあり平家物語ある山僧が言ハ醫王
山王と云るを思ふハ大宮大己貴神ハ一も薬師神ハ
渡らせ給へれハ醫王と申奉り二宮大山咋神ハ一も
亦名を山末之大主神と申奉れども山王とハ申習ひ
けむを何時下と此地主神の御事より廣く此大

山王又日吉社記
山王者三回名山
之守護故也
天竺聖觀音山之
鎮守山王権現
無熱池大唐天台
山之鎮守山王権現
北畠山之鎮守山
王権現云々と云
事の

宮をも併せて山王とハ唱来る事ハ成れりけむ
又或書ハ叙最澄入唐歸朝創建延曆寺於此觀山擬
異邦之天台山亦以天台有山王祠因日吉神社
王と看ハ自山王と云名を負せ奉りあが其本
忘れて斯る説ハ及べり笑ふ可き事ハ其本
其より此山王と云ハ就ても忘るハ邪説の出
来りて此山王と云ハ就ても忘るハ邪説の出
れ彼最澄と云ハ就ても忘るハ邪説の出
をさへハ惑ハ一奉りて神地を犯りて梵刹を營
了程の者ありけハ其巧言ハ昔より以降欺ハ
了人の無きハ假字ハ其意ハ無き事ハ此
と書ハ本より假字ハ其意ハ無き事ハ此
敵慮の義を以て此敵山と号く東觀山と云ハ
き物ハ申掠め後ハ其を羨みて起ル事ハ下野
出来れるハ実ハ妖僧の文旨より起ル事ハ下野
回ハ二荒山ハ式ハ依り布多良と訓ハ男休女体
山の相並べり其日光の字ハ就て此敵山と云ハ
も有ハ一より其日光の字ハ就て此敵山と云ハ
奇事を説ると同ハ事ハ此敵山と云ハ

△此神者坐也
淡路國之枝山
と云ひ世々
△申す三輪明
神と傳教大師の
天台宗守護神
の爲に勸請し
奉給へり
△大宮権現
す大比叡と申
す二宮ハ地主
す小比叡と申
す一宮ハ地主
執り奉り
と云ひ世々

と心得山僧の所置あむ止むべし成れりける右
の兩神と云るハ大比叡神小比叡神を申し兩山と云
ハ其敷坐る大比叡山小比叡山を云ひ山神とハ其兩
神ハ元より此山を主領ま御在り坐つれハあり備此
大比叡神小比叡神と申奉るを思ふハ其始ハ大嶽と
横川と二處ハ御在り坐つるを最澄神中抄九下小日吉明神が延曆寺を建
て今ハ坂本ハ下り奉れりありけり本より彼徒
の預り可き神社ありされども其因ハ彼徒をして
作らしめ給ひけむあり自ハ山僧ガ物の如く成れる
を終ハ内珍ハ至りて右の如く佛場の状ハ成竟

△と有ハ更なる山
王耀天記と云る
眞應の頃の事
を書る物ハ二
宮ハ三番事條と
云有て口傳云往
昔二宮横川ハ
比叡ハ御在り
坐けり時天狗
群集して法會
を修りたり作
法を移す云ふ

たけける山家要略記ハ大比叡大明神奉名大宮小比
叡大明神奉名二宮と有る其二宮ハ下ハ雷神と云名
の有ハ別雷神の御名の略りたるハて大山咋神の御
事ありを此ハ執てハ大宮ハ其大嶽より二宮ハ横川
より移奉れり證ハ右ハ引る叙書便蒙ハ小比叡者謂
曲塔横川之中間と云を以てハ其横川の地ある小比
叡あるハて大山咋神ハ其地ハ御在り坐けるありけ
り其ハ山門堂舎記ハ仁和四年二月比叡山横川あり
根本觀音堂燒亡材木運上り條ハ賀茂社賀茂社賀茂社
領人夫多以運上り云事有ハ其始ハ二宮ハ御在り坐
横川ハ其謂ゆハ比叡ハ御在り坐ける程ハ賀茂ウ
氏人ハ其奉れりハ其地を逐て最澄最澄が曆年中ハ坂本ハ
遷り奉れり後ハ其本地堂と云何と云ハ欺り此て

其役夫の使ハ此たり一者ありけり其ハ本朝日令の
引る秦氏本系帳ハ鴨下上松尾の事云て是以秦氏
奉祭三所大明神而鴨氏人為秦氏之為愛賀以鴨祭讓
其之云奉の百て古ハ賀茂の神事ハ松尾の秦氏ハ
り主とれまが如く此ハ賀茂の神事ハ賀茂氏人上
り仕奉れり一者あり可し又賀茂ハ祭祭と云奉有
て其紋所葵ありを山王二宮の神輿ハ葵を紋小者
るふど皆其由緒ある可く所思えたり猶下ふる二宮
の所考合 備其大比叡神と申すハ右百六ハ引了諸神
鎮座記ハ日枝神社者大國主大神也神別名也自神代
兎大山咋大神化遊此處以此山本為六合本柱至豊浦
宮天皇時大神降之替栖以葛野為鎮祠と有を思ふハ
上代より以降大山咋神の主領き坐し地あるを推古
天皇御世ハ至りて大山咋神ハ松尾ハ移給ハ大國主

神を以て此主神と為奉れより大山咋神を其從祀
と成し奉る謂と聞えたり然れハ大比叡神小比叡神
と申奉るも其より出来れる稱めて此ハ山主之大主
神此神者坐近淡海国日枝山と云ハ其より上れる世
の傳ハところ有ぬ可き山家要略記ハ大比叡大明神奉
名大宮と有る是ハ二十社注式ハ扶桑明月集云
大比叡明神俗形老人皇廿代磯城島金刺宮欽明天皇
即位元年庚申大和国城上郡大三輪神天降茅廿九代天
智天皇大津宮即位元年壬戌大比叡大明神顯御日吉典
三輪大物主神此国地主也と云ハ豊葦原卜定記ハも

又同記小大宮建
立此社頭之最初
也二宮ハ三子早外
礼共社者無之翠
御館社頭建立之
初也天智天皇御
宇是也之云云如
社壇を此小定
られたるハ
△殊小出奉り給
ハ賀茂縣主系小
圖小建角身命十
三世孫大伊乃伎
の二男伊多足尼
九世孫宇志九大
津朝祝仕奉り廣
午年籍負祝部
姓為山王最初社
司と有るハの事
ありて此小

先大宮止三諸乃神止同奈と書一日吉神道秘密記小
も大比叡大明神三輪典利御臨幸略早知小比叡社為
我可建寶殿之有て御託宣の趣あるを上件小通ハ
て思ふ小其欽明天皇元年小大比叡山小遷りせ給へ
るを推古天皇御世小大山咋神ハ松尾の主祭ト一也
此小ハ從祀と為りて大比叡神小比叡神と稱別る
事トハ成れり（可）天智天皇即位元年頭御と云
る父其御世小大津小都を遷されてより大宮近き神
小て御在り坐を以て初て祝部（め）をも附（奉）せ給へ
る（奉）を其小就て種々の安説供を後より作添ら

たり事共多りれども皆（僧徒の手成れり者あり）足ざり事共あり今
琴す又其要略記小引る（相應和稿）秘記小大比叡神殿内納大
坪終坪又高屏風下有雙枕と云る終坪ハ結坪ハ誤ふ
るむ（此）依る時ハ夫婦二柱共小御在り坐す御事
と所見たり又其（日吉神道）秘密記小大宮大國主神又大國作神
中俗形（冠）但非普通御冠如寶冠御笏持左右御子合
給笏御袍薄朱衣表袴御鬚面方撫給御齡四十歳餘於
唐崎琴御館礼拜之給御形作之略ト有ハ如此御形
を造て神体と成り奉れり由めて天智天皇の當昔の
貴服の狀と見ゆ（石小琴御館と云ふハ祝部宇志九カ亭ありて初て大宮の御神を祀へる所）

△其宇志を... 茂縣主系圖... 王依茂命十一世孫... 大伊の使命の子阿... 俊使命の子伊多... 足尼余の子伊賀... 多足尼の子鴨野... 主賀と云人有... 其下此人有... 世孫鴨野主宇志... 大津朝廷祝仕奉... 而庚午年籍負... 祝部柱と云此... 人の事あり又一... 本小伊賀多... 尼立世孫宇志... 大津朝廷祝仕奉... 庚午年籍負祝... 姓為山王最初社... 司と云り遷天... 記小宇志九御館者... 任祝職所隨神事... 也抑鴨野主與祝... 部宿禰同事也... 天智天皇御宇云... 仰云汝地鴨野

を云ふり... 尊像有刻彫奉成御遷宮其時御詠歌東より琴御鏡小... 誘ハレて此山末の苗松風宇志丸兼知之重而有懇... 祈神号御形其時園於曾夜空中如日輪光明為照耀而... 日輪之内有文字依之奉称大宮就日輪之驗日吉大... 宮権現崇定給御形再拜懇祈刻大文字現形故号大宮... 大書して大宮を加多知能美夜と訓り是太有偽... 大宮と云小比叡神の對ひ大比叡神と稱奉れり... 等しく此小比叡神の本社有る事他社の例中て... 知べし己くより僧徒の為小奪ハレた故小斯る安... 説めざる多小比叡神ハ山家要略記小比叡大明神... 山王遷天記小大宮御事大宮と申す即鳴鶴明神と申す是... 賀茂在崇宮の支神を生す事不賀茂と申す小松尾明神の御如... あり云と有る事書ハレた山王事餘小宇志を鳴鶴明神と云... 申すは有る彼大比叡神亦名山末之大主神此神者生近淡海國... 日枝山亦坐葛野之松尾用鳴鶴神者也と有る是能符合へる者... りく之遷天記小大宮御事大宮と申す即鳴鶴明神と申す是... 子愛深明王童形と有る彼玉依地命の丹塗矢小槍を生坐一天神... 御子七間神と云遷宮者命す可推めたる小比叡神ハ式小載

王改可云祝部子孫可召仁也永高氏人云と云多神記の事也見えたる事と鴨野主同流ありて仁奉事全く... 如云云神ハ大山作神小坐て賀茂在崇宮神と同一神也云云事也見えたる事と鴨野主同流ありて仁奉事全く

△又遷天記小大宮... 大比叡山王... と申し二宮をハ... 小比叡山王と云... 申ありと見え石... の

たる扶桑明月集小大比叡明神の次小比叡明神俗... 有ハ此二宮小當り秘密記ハ二宮を小比叡大明... 神天地開闢之神諸神惣大祖神是也と云ハ又地主大... 明神と云ハ上百六の也云ハ如く山末之大主神... 此神者坐近淡海國日枝山と有る是有るが其天地開... 闢之神と云ハ此大山咋神ハ一と御父大國主大神... 中從奉りて山を穿ち水を通りて國工を作給ハ一御... 事の御在坐を以て例の國常立尊と偽る種子とハ... 成れるあぐる其據ハ右の事より出たるなり又上百
十四ノ考徴せし如く別雷神大山咋神山末之大主神

△其宇志を... 茂縣主系圖... 王依彦命十二世孫... 大伊乃使命の事河... 伊使命の子伊多... 足尾余の子伊賀... 多足尾の子鴨野... 主賀と云人... 其下此人有... 世孫鴨野主宇志... 大津朝廷祝は奉... 而庚午年翁負... 祝部柱と云此... 人の事あり又一... 本小伊賀多...

△又耀天記小大宮... 小大比叡山王... と申二宮をハ... 小比叡山王とハ... 申ありと見え右... の

△同記小若宮小比... 叡大明神勸請依... 之等此叡止之事... 有國常立尊を... 有若宮と申すハ... 其謂無れ此と... 大宮大國主神... へ其御見神... 惟ある証して神... 名を偽ると為れ... 隠れ所有に... 神の御堂と云... 甚可畏くを所鬼... えたる

を云ふり備此大宮の御事... 尊像有剋彫奉成御遷宮其時御詠歌東より琴御鑑... 誘ハれて此山末の苗松風宇志丸兼知之重而有懇... 祈神号御形其時園於宵夜空中如日輪光明為照耀而... 日輪之内有文字依之奉称大宮就日輪之驗日吉大... 宮権現崇定給御形再拜懇祈刻大文字現形故号大宮... 大書して大宮を加多知能美夜と訓り是太有偽... 大宮とハ小比叡神の對ひ大比叡神と称奉れ... 等しく此ハ其几のの本社有る事社例中... 知べし己くより僧徒の為小奪ハれ九社故小斯安... 説めざる多小比叡神ハ山家要略記小比叡大明神... 奉名二宮と云て其下小亦雷神と云事の見えたるハ... 即賀茂松尾おて大山咋神を別雷神とも称奉る其御... 名を心得誤りて雷神と心得僻めたるおが却りて... 國常立尊と申し掠めたるハ勝れけり注式ハ載

主改司云祝都子孫可召仁也永為氏人云云神記の事七見えたるハ鴨野主同流ハして仁奉る事云々

たる扶桑明月集小大比叡明神の次ハ小比叡明神... 有ハ此二宮小當り秘密記ハ二宮を地主権現小比叡大明... 神天地開闢之神諸神想大祖神是也と云ハ又地主大... 明神と云ハ上百六のハも云ハ如く山末之大主神... 此神者坐近淡海国日枝山と有る是あるが其天地開... 闢之神と云ハ此大山咋神ハ御父大國主大神... 中從奉りて山を穿ち水を通りて国工を作給ハ御... 事の御在し坐を以て例の國常立尊と偽る種子ハ... 成れるあぐる其據ハ右の事より出たるなり又上百... 十四ハ考徴せざる如く別雷神大山咋神山末之大主神

共小異名同神小て松尾賀茂兩社の御神と等しく御
 在坐ある事尊卑分脈小事代主神命近江国日吉二
 宮号小比叡大明神と記され神系圖小大山咋神の御
 名を奉て下小別雷神山王二宮山城国松尾大明神と
 有て共小符合ひ又白河故事考と云物小八溝嶺神社
 黄金神也今所祭二座山王大已貴命日本事代主命と
 有ハ混れざりし以前の説を傳へたり十者小て二宮
 を事代主神と云ハ傍證ハ成べき者あり又右小引
 諸神鎮坐記ハ日枝神社略自神代見大山咋大神化
 遊此處以此山為六合本柱至豊浦宮天皇時大神降之

返父大神替栖以葛野為鎮祠山城国松尾神祠是也
 有も其地主大明神と聞ゆる此小比叡神の御事ある
 を思ふ可き者あり又公事根源(四)賀茂祭條ハ今日
 人々葵挂の髪を懸るあり賀茂松尾の社目前日より
 申て御祭時則至願也ハ詠言云大和の深淵を以て祭何れ
 小御舟繫が云云と見え祭日儀式事の下小御取物事云大宮云云
 楢祝此間大津村ハ等参後詠言定次御尋也と神代事と相
 り又御舟繫が云云と見え大和の深淵を以て祭何れと云
 有之不考云と有之大神ハ大三輪本社の御祭日を奉りけ
 御事極亮其ハ小御舟繫が云云と見え大和の深淵を以て祭
 有之爲りけりし

中ハ卯月中申日比叡の祭めて其日過れば桂の枝
 を賀茂の参りて給ふ次酉日賀茂の御阿礼過れば葵

新古今集賀茂祭の午日よめり
 大和の海山嵐の浦
 西吹けハ何方の浦
 小御舟繫が云云と
 有之其禊天記を
 見れば大宮御事
 條ハ三輪明神と
 思ゆるなり其故
 ハ大和國より滋賀
 浦小來る事決ま
 り其有見大宮
 日記具工御歌云
 桂木神木之流
 一也御杖差置給
 御舟繫之始也故
 祭礼申日内陳桂
 進上則社家中
 一枚宛冠角差
 之禁裡國の進獻
 云云

共小異名同神にて松尾賀茂兩社の御神と等しく御
在し坐ありの尊界分脈の事代主神命近江国日吉二
宮号小比叡大明神と記され神系圖小大山咋神の御
名を奉て下小別雷神山王二宮山城国松尾大明神と
有て共小符合ひ又白河故事考と云物小八溝嶺神社
黄金神也今所祭二座山王大已貴命日本事代主命と
有ハ混れざりし以前の説を傳へたりし者亦て二宮
を事代主神と云ふ傍證の小成べき者あり又右小引
る諸神鎮坐記小日枝神社略自神代見大山咋大神化
遊此處以此山為六合本柱至豐浦宮天皇時大神辭之

返父大神替栖以葛野為鎮祠山城国松尾神祠是也
有も其地主大明神と聞ゆる此小比叡神の御事ある
を思ふ可き者あり又公事根源(四)賀茂祭條小今日
人之葵柱の髪を懸るあり賀茂松尾の社司前日より
然る可き處へ奉るも有て此を葵祭と云ハ世中名
高き事ある小秘密記小大宮の御神の事あるも尊神
携持給御杖差此地給早生付為柱木青葉相出と有也
橘経亮主の香早備忘小無名古寫本抄出と記され也
中ハ卯月中申日比叡の祭めて其日過れば柱の枝
を賀茂(八)参らせ給ふ次酉日賀茂の御阿礼過れば葵

新古今集賀茂祭の午日よめり大和うと海の嵐の浦西吹けハ何方の浦小御船繫りんと有ハ其想天記を見れば大宮御事條ハ三輪明神と思ゆるなり其改大和國より海野浦小來る事決定

〇但願天記小村
 天皇御時身二孫
 宣延六位上安國
 康保二年正月
 二日任祝此御時
 大宮南門樓前有
 大橋依先例祭祠
 日取件柱今持下
 部春運社松尾
 〇但願天記小村
 天皇御時身二孫
 宣延六位上安國
 康保二年正月
 二日任祝此御時
 大宮南門樓前有
 大橋依先例祭祠
 日取件柱今持下
 部春運社松尾

を日吉へ参らせ給ふ桂の枝参る時小葵之鬘小
 諸鬘として懸るあり此殿の祭の延引の年桂の枝
 参らず故小諸鬘を懸ぬあり六花説夏部の見ゆと有
 りと或書ゆ云り今と賀茂社の紋と此二宮の紋と共
 小葵あるなど共小共同神小御在坐を以て萬小相
 同トキ者あり右の云る如く此神小比叡神と申して神代より
 其横川の地中御在坐一奉右ゆ云る如くあるを秘
 密記ゆ大宮建立此社頭之最初也二宮八王子早初礼
 共社無之と有れば上古より其小比叡山小御在坐
 七末社壇の出来此の違の後の事あるを彼最澄が為小山下下され給へり非りけりある可又山王本社建立之次

弟初大宮次二宮云云と有る如くみて横川の御社の
 定ぬる天智天皇御世の事と所見たり諸神記小二
 宮号小比叡と有て下小二宮正一位壽永三と有る或
 書小其八百練抄小壽永三年三月廿七日日吉并北野
 神位記請印云云日吉神位記行神祇官畢と有る度の
 事ありと云り然る事を秘密記七社位階條小二
 宮正一位後白川院御宇皆同勅裁と有り其小比叡神
 坐小比叡横川の地古波母山と云けりの本御在
 小波母山比叡の初鎮座御詠哥日本関前也波母
 山大明神波母山臨幸御哥何事御在坐瑞籬
 の久く成ぬ見奉るて此御返事波母山之御哥也
 有ら云ふも足ぬ事あぐる當昔小比叡神其山小御

日本書紀傳 二十六

〇百七十一

此地主神と申す
事傳廿九卷旨
丁大地主神の下
み云り

在坐ける御事の有り依て然る安哥をよ作れる
あゆめど又一澄み備ふべき者あり日吉行幸記小
二宮権現と申すハ荒金の地を領し給ひて万物を生
育し神代の當昔より此宮の住給ひて波母山の主と
成給ふ故に地主権現とい申せりとも有り今思ふ小
波母山と云て義を成さず元ハ賀茂山ありけむを字
を彼母山と書るが彼を波と誤れるあり可し此神の
御在坐す地を賀茂と云事例有て盡しも得難き程
の事ふれハ其ハ今云ふ限ハ非ずと虽も右云る如
く賀茂松尾日吉の三社ハ相共ハ去まトき由縁の御
在坐す御事故此日吉神社ハ往古より祭來る所大
を思合す可し

比叡神小比叡神二神ハ御在坐を官より一座の
御會叙あり一事此條の初ハ云るが如し秘密記ハ社
頭者上下兩祖之神威之事兩神社與初者大宮二宮兩
神也云之酉日神事皆以兩社計也云云と有ハ其初ハ

唯大宮と二宮との二社のと世ハ聞え給へるを其二
社の外又五社を合せて山王七社と云事ハ成水り山
家要略記日吉七社降臨無跡時代事杖桑明月集云江大
匡房記匡房在世之時号と有る此書ハ大比叡明神小
臘月集没後改名明月集
比叡明神聖眞子八王子客人十禪師三宮と次第たる
是あり上の二社ハ上古よりの本社あるハて次の五
社ハ各其兩社属たるハ撰社ありつむを上奉りて並べ奉
るれ一ありけり夫木集小経信卿日吉山七坐す神の
跡垂れて曇くぬ影ハ世を照らすむと有あど申古
より以降山王七社と普く世ハ申習へる事あり又秘

密記小山玉本社建立之次第初大宮次二宮次聖真子
次八王子皆字志丸後十禪師又三宮又客人有乙次
御嚮影初中後有初二宮小比叡山大明神日本以前典利
波母山来至給利次八王子者略第十代崇神天皇御宇
也是迄者社頭建立無之第三度日大宮建立略天智天
皇御宇是也第四聖真子大宮典利十年後也云云
石小宇志丸作始云云是あり第五十禪師延暦二年
御影嚮第六三宮同三年御影嚮第七客人宮天安二年
建立云云有水ハ七社云云稱ハ已云云當昔より在云云稱ハ
りけり故此を上七社云云其後亦作加へて中七

合禮天記小二宮を
從一位聖真子を
正二位として美
安二年三月二日
小進りれたる小
或記云五月二日
宣下と有り八王
子ハ同時小從二位
壽永二年十月
九日正二位客人宮
ハ美云云小從二位
壽永小正二位從
一位と有り十禪
師も右山同云云三
宮ハ壽永小從二
位と有り正二位小
進りて給り趣
あり又

社有り後又作加へて下七社云云都云云を俗ハ山玉
廿一社位云云是あり同記ハ七社位階云云有ハ大宮正
一位最初正三位次二位二宮正一位聖真子正一位八
王子正一位客人正一位十禪師正一位三宮正一位以
上後白河院御宇皆勅裁云云有ハ百練抄ハ壽永二年九
月十五日上皇御章日吉社去七月廿四日御登山之間
有御願之旨云云被奉増神位云云有乙同三年三月廿七
日小日吉神位記行神祇官畢云云見えたる是を云云あり
但注式ハ大宮人皇五十七代陽成院元慶四年正一
位二宮第八十一代安徳天皇壽永二年正一位云云有乙
上件ハ合云云を聖真子八王子客人十禪師三宮第八十
八代後深草院建長二年正一位云云有乙右云云合云云今就

此より以前は
 安貞二年十月廿
 日吉社聖旨
 八王子宮人十禪明
 三宮寺の奉授
 階之由被宣下
 と云事有り

此は是る事を知らず右の秘密記の山末社正一位
 と有り此の謂ゆる下七社と云中なる神位の然抽
 出させ給へるは山末之大主神にして即二宮とハ
 同神の凌りせ給へれども上云るが如く此地主神
 の御在し坐り大宮を建立の初より其傍に勧請さ
 れ猶古義の遺りて殊に此社若て七社の第三ハ聖眞
 の崇敬厚りしが故あり若て七社の第三ハ聖眞
 子あり豊葦原卜定記の聖眞子波吾勝尊奈と云るハ
 然る言あり此字ハ仁明天皇御紀の四十の實筆を奉
 賀る長哥の飄葛乃天照国乃日宮乃聖之御子曾と有
 る聖之御子の意を以て書たる可き此ハ二宮の御
 神の由有て此の御在し坐ある可し其ハ元曆奏上記
 の賀茂別雷自天神宮社四座中所祭正哉吾勝連日

天忍穗耳尊左高皇產靈尊右武祇命後事代主命也
 欽明天皇廿八年四月中自大和葛木鴨逢日村社本所
 祭三座兒神皇見神以味耜高彥根命神命陪之地依神宣
 遷山代別雷山遺味耜高彥根命止葛木鴨吾勝尊與兒
 神至祭於山代以皇兒神忍穗耳尊祭上社以兒神煮尊祭下
 社と見えたる意其間自神代所鎮上社事代主命
 下社大己貴命而已と有る其上社の事あるが神宣有
 て葛木鴨社にして味耜高彥根命の陪りせ給ふ素戔
 鳴尊忍穗耳尊を迎春りて素戔鳴尊を下社に忍穗耳
 尊を上社に併せ祭りし給へり者あり其所由ハ

傳十五二百三十四注るが如し此の二宮八事代主
神の御在し坐う迎取て上賀茂の状の成十給
へるある可し秘密記の聖真子正哉吾勝速日天
忍穂耳尊是也天照太神第一御子地神第二番尊神略
第四十代天武帝御宇白鳳十年御影向と有り然るに
注式の人皇十六代應神天皇輕島明宮御代天降第卅
代欽明天皇廿二年辛卯鎮西豊前国宇佐郡八幡坐と之事
有ハ心得ず神名式の謂ゆる豊前国田川郡忍骨命神
社即彦山の御事御在し坐せハ其より勸請され
奉あつたの有と然云誤りたる者あり然れども此を以てハ

當社の吾勝尊にて渡りせ給ふと云ハ偽りてハ有ハ
りぬ事を知りぬ足れりと云へるは但右引る
豊前国宇佐郡八幡坐と有ハ合せて秘密記の第十代
天武天皇御宇白鳳十年御影向尊神御出生應神天皇
後八幡宮現形と云るハ例の慢事ハ傳十八卷五
十九下注るが如く宇佐にて比賣神と申すハ三女
神の御事御渡りせ給ふハ此の大神御在し坐せ
ハ御在し坐し神と素戔嗚尊の御子御在し坐せ
て日知之御子と申すハ其より後ハ祭られ給
へる云る可き状なれども其より後ハ祭られ給
き捨てハ王子の御事ハ明月集ハ天神第二国杖槌尊第
十代崇神天皇即位元年甲申近江国滋賀郡小比叡東山
金大巖傍天降八人皇子引率天降故謂八王子神祇宣
令日言

八王子者天照太神所生之五男三女等八王子也
を国常立尊と申す類かて更ニ由無き事あり又五男
三女神と云も八王子と云ふ叶ひて尤モ聞ゆる物
其も亦推量の説ありけり秘密記ハ八王子者八
十萬神引率而天降金大巖時代第十代崇神天皇御宇
也是迄者社頭無之大宮建立此社頭之最初也二宮八
王子早祀共社無之と有ハ元より御在り坐す神
其御社ハ大宮と共ニ天智天皇御世ハ初て建
れ趣あり其下八王子宮の所ハ東方石有号天磐
船明神乘之御臨尊也と云ひ又八王子の下ハ諸国

在ハ所ハ御影嚮悉号八王子以御神カ諸人信敬事
と有り右ハ天降金大巖と云ひ又天磐船と云ふ其
社を建テ其石を神体とシ祭ル事ト神妙ト云ふハ唯大石あり諸国在り所
其御影嚮と云ふ傳十二六下十注ス如ク岐神の御
事ハ石玉御在り坐けり志陽略志と云物ハ彼志摩國
ハ八皇子社と云ふ四十五所有る中ハ各志郡鳥羽縣
ハ皇子神社靈形船座と云も右ハ天磐船と同一岐
神ハ坐故ハ船を以て神体と為る由あり神名式ハ河
内国大縣郡常世岐姫神社今称ハ八王子と志ハ云ふも
證ト為ル今モ諸国の辻社ハ石を建て八王子と称

奉了八道饗祭詞謂り八衢比古八衢比賣久那斗
の三神御在十坐を伊勢方として此を饗土と云る
即饗處の事あり其小て此比敵の山道を守給ふ手向
神御在十坐の其當昔社を建る事無く
右の金大巖又天磐船を以て神体と為て往古より祭
来れる者と見内秘密記の金大巖八三兩社御間是也
奥長石也巖上又靈石有之と有下八王子の天磐船
相似たり又八王子伏拜拜殿有靈石則八王子御神
と有て伏拜處と雖も唯拜殿のえりて靈石を以て
神体御在へると餘の六社の例のハ異ありふ心

を著て考ふ可き事ありむ然れハ此三宮を以て国統
強て尊く為むと為る妖僧の妄意の出たり可くハ王
子を五男三女と云ハ何の弁へも無き神人の手の出
て共に誤る事も更あり秘記の八王子俗形の束
帶赤袍帯大乃云る後の作れる神体ハ一つ更に
據し足が借岐神の大國主神の由有る事ハ天孫降臨
章第二一書の大己貴神云乃薦岐神於二神曰是當
代我而奉從也と申させ給へる事右レと此ハ然る
所以の因りハ非ず此地の道祖神御在十坐ハ
社祭れるあり客人宮ハ明月集小客人形第五十代桓
武天皇即位延暦元年天降八王子麓白山菊理比咩神
也と見え秘密記の客人宮女形日本開闢神伊弉册
尊是也白山妙理大権現御影向有我子也柏木上有御
影嚮但社壇無之相應和尚於横川坂御對面依之建社

△栢木を神木として祀り末社壇に非りける

天安二年六月十八日有御遷宮小白山太已貴兩神有
同社同建社と云り然此延暦元年王于麓横川勸請此
を後天安二年初て社を定奉れりあり新古今集
小月吉の客人宮の詣て左京大輔夫顯輔年終と
越の白山忘れず頭アヒの雪を衰と見よ続古今集
客人宮の奉ける後京極攝政前太政大臣此又光を
分て宿す哉越の白嶺や雪の故郷と云哥も見えたり
此ハ決く菊理媛神の御在り坐けり此御神の御
事ハ己の傳十三八十も説く如く亦名を泉守道者
と申して岐神の御事あり右の八王子と同体の神

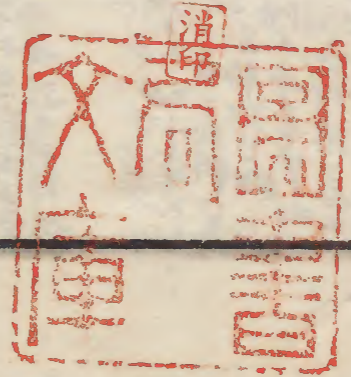
みて渡りせ給へれ其地を樹る栢木を御座として
別小社壇を設ざりし此も謂ゆる饗土の神の御
在り坐つるあり客神人宮と云事ハ秘密記ハ此陸
横川坂布袋邊相應和尚御對談之刻女体登何不審之
御返答客人御名乗故也と云例の偽る可し御此
神ハ黄泉國成坐て其黄泉神を壓へ給ふ神ハ渡り
を給へる故に此顯國坐せとも御在り坐て疎び荒び未
し坐さ給ふ神ハ此國神坐せとも客人神と申けむを取
めて問答の御名十禪師の御事明月集ハ十禪子童
乘と偽りたる可し十禪師の御事明月集ハ十禪子童
形桓武天皇延暦二年癸亥正月十六日天降地主宮前と
云り豊葦原卜定記ハ十禪師天津彦彦火瓊杵尊
也十禪師止申奉波止七代天神地神乃三瓊合天之

秘記の十禪
 所記二十有餘天
 津彦火瓊杵尊
 世地神等三尊神
 延暦二年御影向
 四年七月廿四日於
 上御形而傳教
 大師御持敬云云
 大師の言あり何
 ぞ彼神地を穢
 探の奉らば傳
 御在坐む又

十世禪止讓天加護乃義有利と云る是実の然る可し
 一説の賀茂別雷神社の相殿に此瓊杵尊も御在
 坐と云れに中昔も然る説の有て此二宮の御神
 就て祀れるも有べくや但元曆奏上記の御事見えず備十禪師
 云事も後代僧共の号奉れるあり右の天七地三の御
 事を云るあり非ぬ私事あり古より云来れる
 子為む三宮の御事ハ明月記の桓武天皇延暦六年
 ハ王子金大巖傍天降天照太神共素戔嗚尊誓給所生
 五男三女中三女也故名三宮と有り秘記の三宮
 女形三琳御賀女唐女持團子依三女之影嚮奉祢三宮
 乘紫雲自東方来臨給と所見たり此三女神ハ一も傳

秘記の十禪
 所記二十有餘天
 津彦火瓊杵尊
 世地神等三尊神
 延暦二年御影向
 四年七月廿四日於
 上御形而傳教
 大師御持敬云云
 大師の言あり何
 ぞ彼神地を穢
 探の奉らば傳
 御在坐む又

十五丁より始めて委しく注し奉れるが如く三柱
 の別れて成出させ御在し坐しうども御身を合せて
 須勢理毘賣命とも玉依姫命とも由良比命とも申
 奉りて此大宮の御在し坐す大國主大神ハ后神ハ
 御在し坐し二宮の御在し坐す大山咋大神ハ御女
 神ハ渡らせ給へれば松尾のとも大山咋神胸形中
 都大神共ハ相並ませ給ひ賀茂のとも御祖神社ハ其
 別雷神の御母神たるを以て此三前大神を立て被祀
 る例あり此ハ必右の兩社ハ擬ひて奉斎する可き
 御事申すも更あり然るハ大宮の鎮座ハ天智天皇元



年あり此の御鎮座ハ延暦六年あり凡百二十六年許
 後れさせ給へり故思ふ山家要略記ハ載九る相應
 和尚秘記之云物ハ大比叡神殿内納大坪終坪又高屏
 風下有雙枕と云るハ事實ハ例の如てハ有ま相配
 りけれハ此大宮ハこそハ彼頭懸りて今ハ至了迄
 鎮坐るめと思成奉る事ハ此三宮の御方ハ
 後ハ其御靈を分て祀りれ者ハ所思えられ
 故思ふ此三宮ハ彼八王子ハ並ハせ給ひて其中間
 謂ゆる金大巖有る事ハ上ハ八王子ハ此ハ
 八王子ハ謂ゆる天降御在坐ける由云ハ然ハ
 彼三神ハ饗土祭れるを以て三宮云ハ其傳
 を失ひて八王子を五男三女神ハ此を三女神ハ當て

